

# ELEC

## BULLETIN

Vol.1, No. 3

December 1961

巻頭言 ORAL APPROACHと英文学……………	斎藤 勇	1
神田乃武の想い出……………	高木 八尺	2
RECENT LINGUISTICS AND THE TEACHING OF ENGLISH (Continued)……………	Archibald A. Hill	8
訳文・最近の言語学と英語教育(続)……………	松下 幸夫	13
英語音素論入門(I)……………	牧野 勤	37
1961年度 ELEC夏期講習会特集……………		17
THE LIFE AND TIME OF THE FRESHWATER TROUT……………	Fred S. Thompson	33
Question Box Relative Pronoun……………	若林 俊輔	42

TAISHUKAN

# ORAL APPROACHと英文学

斎藤 勇

ELEC は、Oral Approach を英語学習には最もよいやり方だと考えて、その普及を計っていること、改めていうまでもない。

私は今まで、英語教師には文化に無頓着であったり、ただペラペラと英語をしゃべることが目的であるかのように考えたりする人があること、また学習者も外国人のまねさえすればいいと思うようになっては大変だと、たびたび痛歎した。自分で考える力がなくなっておしまいだと、今でもそれが気になる。

その私が ELEC 委員の末席に名をつらねて、Oral Approach の普及に賛成しているのはどういうわけか、矛盾ではないか、という人がもしあるならば、一英文学者として、また英文学を講じている一教師としての立場から、その疑問に答えておきたい。

1. 私は、何を話すかよりも英語をしゃべることが大事だと思うことを非難するけれども、英語で話したり書いたりすることの重要性を認める点においては人後に落ちない。英語で問答することだけが「役に立つ」のではないが、それもゆるがせにすべきではないから、Oral Approach によって正確に聞きとり、りっぱに答えるようになることは、まことに望ましい。

2. Spoken English(会話や朗読によって発声された英語)によらなければ、英語の rhythm がわかるようにはなれない。単語の発音だけでなく、文章の intonation によく気をつけていなければ、リズムの妙味を会得することはできない。リズムがわからないならば、文体の巧拙もよくはわからない。文体を味わえないならば、文学——散文もそうだが、特に詩の余韻は響いてこない。つまり散文の鑑賞は不十分であり、詩の鑑賞は更に一層不十分にしかできない、ということになる。従って英文学を勉強するにも、Oral Approach によってできるだけ初期に英語のリズムに耳を慣らすようにしたい。

もっと具体的に説明すれば、私の論点がもっとはっきりするだろう。明治初期には英語の発音はめっちゃであったが、もっとのちの文法家などでも Gray の Elegy を詩吟の調子で朗読したとのことである。大正になってからでも、英文のリズムや英語の metre にはおかまいなしに勝手な読み方をして、原作のよしあしを放言したものらしい。我々はもっと英文の音楽美に注意しなければならないが、それは prosody の本を読めばわかるとは限らない。自分の耳で感じとり、それを prosody によって説明するようになるのである。最初の条件はリズムがわかることである。それには Oral Approach で耳を慣らすことが一番いい。

こういう点からも、私は ELEC の主張に賛成なのである。

# 神田乃武の思い出

—ELECの事業に関連する感想

高木 八 尺

おことわり

神田乃武(1857~1923)といっても今では知らない人が多いのは当然ですが、彼の生涯を約言しますと、14才に満たぬ頃、養父神田孝平の友人森有礼(初代の駐米公使)に托されて、アメリカに留学させられ、9年間アマストという学校で修業し、同大学卒業(1879)後帰朝、大学予備門を振出しに、古典語や主として英語教育に従事し、明治22年正則中学校の設立に参加、26年に東京高等商業学校の教授となつて、英語教育に専念するようになった(29年に東京英語会設立)、1900年英語教授法研究のため米英独仏等諸国へ留学視察の機会を与えられ、その後一層「英語リーダー」の編著等により、英語教育に尽そうとしたのでした。

この略歴からも知られるように神田は語学を学問的に勉強し把握した英学者とはいえません。況や筆者私は、素人としてELECの目的や事業に心からの共鳴を抱く以外に学問としての英語には門外漢であります。本誌への寄稿として、本当は課題も執筆者も妥当ではありません。強いといえば専門家は、時々門外漢の妄言にも耳を傾ける余裕があるということでしょう。私は、肉親の關係が公正の評価をあやまることなどのないよう心しながら、ELECの目標・活動に深甚の共感と熱意を抱くものの一人として、それと神田等が暗中模索した英語教育の目標との関連というようなことについて、私なりに申し述べて見たいと思います。殊に私から見れば、わが国の英語教育に対する神田の貢献は、たとえあったとしても、彼自らのものではなく、実に稀に見る優れた先生の指導や、卓越した友人の協力の賜物であり、更には時代の与える幸運であつたと思われる節が多いのです。そんな感恩の念を含めてELECの目的への前史的探究と献身とが、わが英語界の先人の記録に認められること少くない、その一つの例として、神田についての回顧を試みようとする次第です。(この小文で私は、敘述に、神田をつとめて過去の人物として客観視して扱はうとしましたが、後段彼を父と呼ぶ話し方になつたりして、統一を欠き、総じて読みにくいものになつたことに、読者の宥怨を願います)

I 神田がシーリー先生から受けた語学上の鴻恩  
神田が初めてアマストに行ったのは1871年の夏で



したから、シーリー(Julius H. Seelye)先生は大学の哲学教授として令名を馳せた頃であり、恐らくその前年まで在学した新島襄を通して、森もその優れた人物を知っていたのでしょう。(翌1872年森の質問回答に答え、シーリーが、日本の新教育制度への希望として、知性のみならず徳育を目ざすことの重要性を指摘し、更に宗教自由の重要を説き、この一文は後に森が出版した「日本の教育」に不減の一寄与をしていることは、内村鑑三の夙に唱えた通り、わが教育史上に記憶すべき事実でした。——鈴木俊郎「世界史と日本の問題」33—9。その年の春、神田の日記にもシーリー教授が東洋への旅を企てている旨話したと記されていますが、シーリーの印度での名講演 The Way, the Truth, and the Life は後に内村の手で邦訳されています)。そのシーリーに森は神田の教育と生活の指導を一任したものと思われまふ。

それで神田はシーリーの紹介で、ミセス・デーウィスという婦人の典型的なクリスチャン・ホームに受け入れられ、アマストの幾年かを送りその一員のように生活したのですが、これは神田の終生忘れぬ感謝の経験となりました。また他の教授などの家庭とも親しく交わり、小供達は毎日のようにクロケーとか冬はシーリーの池でスケートをしたとか、楽しく過した模様です。



(上) 神田乃武がアマースト大学より授与された金メダルの表(写真左)と裏(写真右)、実物の約1.5倍に拡大。本稿6頁参照。  
(左頁) ありし日の神田乃武

しかし、私が特にここでお話したいのは、このシーリー先生が、神田の留学の初期、何ヵ月かに亘り神田を招いて、自ら英語の発音の基礎的訓練をみっちり授けてくれた事実です。神田は後年アメリカでの一講演中にこの事実に言及し、恩師の鴻恩に対する感謝を表明していますが(*Memorials of Naibu Kanda*, 1929, p. 251) 私の記憶では、父は a e i o u の母音の発音を初めとして、英語の発音やアーティキュレーションの根本を懇切丁寧にたたきこまれたように語っていました。(1872年1月の日記に早くも2日から ellocution のためシーリー家に行ったとあり、類似の記入は極めて多く、或はでき上ったコンポジションを見せに行ったとか、日記にシーリーの名が見えない日は殆どない程でした。)

思うにシーリー先生は当時既に新島襄の言葉をかりれば「米国屈指ノ鴻学士ニシテ其学深く其芸達シ……先生ノ名望ヲ慕ヒ千里ヲ遠シトセズシテ笈ヲ此校ニ負ヒ其ノ薫陶ヲ望ム者陸続踵ヲ接シタリ」(シーリー著・小崎弘道訳「宗教要論の序文」)という程の碩学でした。そのシーリー先生が、一介の外人中学生のために、長い期間殆ど毎日、英語の訓練を授ける時間と労力を惜まなかったことは、何としても驚異であり、頭の下がる話と思われます。そしてそれは、はしくも神田の胸底に、英語教育における基礎的訓練への熱意を、深く植付けることになったといえましょう。(なお、神田はアマースト大学に入ると直ちに、上級生であった Melvil Dewey から速記術を習得し、それを日常講演等の際に活用したらしく、正確な聴き方や、英文復元に際する正確な書き方の訓練に役立てたようです。これも神田が先輩友人から蒙った恩顧の一著例と思い

ます。神田の同級の親友、歴史家 J・F・ジェームソンは、その追憶文の中で右の速記の技能も一理由となって、神田が在学の4年間クラスのセクレタリーとして選ばれ、勤め続けたと述べています。「メモリアルス」34頁)

## Ⅱ 神田の語学教育への関心と新教育法への努力。——附. 正則中学校設立の意味

神田はアマースト大学卒業に先だつ一二年の間に、当然ながら、将来の方針について思いめぐらし、一時は一生を宗教界に捧げて祖国に報じよ

うということも考えたらしく、養父の孝平も寛容の態度で成行を見護ったようですが、しかし、その中に漸次神田の念頭には、教育の方面に進みたいとの考が強まったらしく思われます。卒業後ウェストフィールド・ステイト・ノーマル・スクールに暫く修学したのもその表われでしょう。

その頃は恰もアマーストがシーリーを学長として戴き、同大学がニュー・イングランドの代表的なリベラル・アーツ・カレッジとして重きをなした時代でしたが、その全人教育の訓練を受け、神田は古典や英文学に関心を持ち、エマソンなどにも深く印象づけられたようでした。殊に英語教育に関連して記憶すべきは、1877年以後、この方面に意を注ぐこと多く、ボストンの「近代語学校」(後にアマーストにて夏期学校を開く)の Sauveur 教授の教を受け、その主張する *méthode naturelle* 当時「会話による語学教育」といわれた方法を修めたことでありました。そのような根幹の上に、帰国後、彼の日本での英語教育の努力は築かれていったように思われます。(「メモリアルス」18—23頁)

帰国後10年して、神田は外山正一、元良勇次郎の二氏と共に、芝公園の一隅を卜し、正則中学校を設立しました。(これより数年前、外山は、夙にミシガン大学への留学を終へ、既に東京大学の教授として、新渡戸が入学の頃「太平洋の橋になりたい」という有名な問答を交わしています。稍遅れて元良もジョンズ・ホプキンスで新渡戸の同窓として心理学を修めて帰り、共に大学の教授でした) なぜ正則という名を選んだか。外山の「日本の教育」と題する小冊子(23年出版、外に「英語教授

法」30年あり)によると、一つには英語の耳と口の訓練を重視する学修、一つには先進国の教育の精神を摂取し、全人教育を意図する青少年の訓育を二大目標とし、語学と知育徳育との併行する一般教育を正則と解し、これを目途する中学校の建設を期したものと解されます。今や元長の嫌はありますが、外山自らの趣意書を読みますと(句読点、傍点は筆者)そこには ELEC の精神と相通ずるものを見出し得るように思います。

〔漢文変則の理〕……外国出来ノ読本ヲ使用スル時ハ、イヤデモ彼ノ所謂変則流ニ陥ルヲ免カレズ。漢文ハ吾邦人ニトリテハ第二ノ日本語ノ如キナルニモ拘ラズ古来変則流ノミ行ハレタルハ、初学ノ者ノ教科書ニ四書五経ノ如キ理屈ヲ六ヶ敷キ文章ヲ以テ綴リタル書物ヲ使用スルノ習慣ニヨルナラン。初学ノ者ニスル文章ヲ読マセントスル時ハ必ず変則流ニ陥ルヲ免カレズ。

〔外国語ヲ正則ニ学バン為メニハ如何ニスベキカ〕外国語ヲ最初ヨリ正則ニ学バシメン為メニハ、簡單ナル問答ノ文句ヲ使用シテ、或ハ教師ト生徒ト原語ニテ問答シ、或ハ生徒同士ニテ問答ヲナサシメ、繰返ヘシ繰返シテ、遂ニ原語ノ儘ニテ能クコレヲ覚エ込マセル手段ニヨラザルベカラズ。輒近欧米ニ行ハル、外国語練習ノ法ノ如キモ大様此法ニヨラザルハナシ。

なお、英語教育と直接の関連はありませんが、この本の中には、数項にわたって我国教育の主要の問題を指摘した後、次のような正則中学校の設立の説目が陳べられています。

以上陳述セル如ク吾邦今日ノ教育ニ関シテハ改良スヘキ点研究スベキ箇条実ニ数ナカラズ、此レ數年前ヨリ余輩が同志者ト相謀リ、尋常教育ヲ為メニ大ニ尽力セントシタル所以ナリ。是レ則チ余輩カ頃者正則予備校ト称スル尋常教育ノタメノ学校ヲ設立シタル所以ナリ

これが正則中学校の由来でありました。序ながらその建学の主旨に、高等教育の予備としての普通教育の普及、学理と実験とに基く本邦教育の基礎の建設、父兄との協力による生徒の徳育涵養の三目標が掲げられていました。

越えて更に十年の後、外山のいわゆる正則の語学教育を、徹底伸張させる努力の表われのように、神田は、英語新教育法の見学視察の目的のため、米英の外、初めて欧洲各国インド等に遊学しています。

(この企ては、時の文相樺山資紀の好意に負う所大きいと思われていますが、この遍歴の間に、ドイツ一國をとっても、ベルリンの Brandl の講筵に列ったり、親しく招かれて教を

受けた外、神田はフランクフルトでは *Musterschule* を訪い、校長 Dr. Walter に導かれて、つぶさに諸教室の新教授法の実際を会得し、或る時は自ら教壇に立つ等の経験をつみ、キールでは、Dr. Hausknecht を初め多数の学者から夫々の経験を学び、殊にハウスクネヒトの長たる *Ober-Realschule* の語学教育に多く教えられたようです。(「メモリアルス」380—4, 463—441等)

このような旅行の成果として、帰国後、恰かもわが英学の黄金時代への一寄与たらんと希うもののよう、神田の英語教科書や文法書の改善の仕事をしました。「神田リーダー」の表紙には四隅に耳と口と目とペンを持つ手との絵があって、この四つが鎖でつながれていました。思うにそれは聴き方、話し方、読み方、書き方の訓練の併行を重視する彼等の主張の端的な表明であったのでしょう。

そんな努力や主張の要梗を述べたものに、1902年恐らく大日本教育会主催の英語教育者の大会で行なったと思われる神田の英語教育に付ての講演があります。(The Teaching of the English Language, by Baron Kanda and Miss E. P. Hughes, Eigaku-shinpo-sha, 1903, pp. 17~28) 次にその一部を引用して、いわゆる新しい語学教育の精神を窺いたくと思いますが、その中で彼は、わが国及び独仏等諸外国に於て、英語教育法に新旧二様のスクールがあるとし、独乙においては所謂改革された新教育に対し、政府は必しも急速の採用を奨励しないに係らず、実際には新方法がかなり普及してること、之に反し我が国では、英語教育法として形式的には新規な「正則」の方法の採用が叫ばれながら、実質的の改善は却って遅々としておることを指摘しています。次に煩を厭わずその原文を掲げて見ましょう。

I need scarcely mention that there [in Germany] as in other countries the two methods exist,—the old method which aims at teaching grammatical structure and translation and the new which aims to teach speaking [hearing] reading, writing, translation with grammatical knowledge, and last but not the least, the so-called *Realien*. Opinions are divided amongst scholars; the newer members of the profession generally advocating the new method....

Now, with us in Japan we have early

caught the spirit of the new movement.... Everywhere the cry is for "seisoku" teachers. The word "hensoku" is synonymous with whatever is old-fashioned.... [Italics mine] The government itself is no longer reserved on the subject. Its instructions to all the educational organs of the country are clearly in favor of the new method. But to have the form is one thing, to have the reality quite another. What surprised me in Germany was that in spite of the difference of opinions, in spite of the reserved attitude of the government they [Germans] had more of the reality than we.

### Ⅲ 父から与えられたものの思い出。それに関する二三の感想

父としての神田から、私は改めて英語の勉強をしてもらったような記憶はありません。本当に私が教えてもらいたいと思った時は、父の既に亡い後でした。僅かな記憶をたどって、一二の思い出を申し上げますと、その一つは私が学習院中等科の四五年かの頃、ある時英語の時間に担当の先生の休みのため、神田が突然に私のいる教室に現われたことがありました（恐らくは教室で対峙した唯一の機会でした）。その時たしか出席簿によって、一人一人の学生が順次に立って、スマイルズの自序伝か何かの数行づつを読み上げて行きました。私の番が来て読み、すんだと思ったら、その一節の中に偶々 *moral* という字があったのを、読み終えた私にも一度言えといいます。私はいとも簡単にモラルといいましたが、それではいけない。も一度、も一度といわれ、何遍となく繰返しましたが、結局失敗に終わりました。正直に申せば、その頃まだ、私の頭の中には [o] や [a] という字は大体仮名のオやア、ローマ字の o や a と区別はなく、[mɔ:əl] という記号の表わすような発音の厳密さは、夢にも浮ばなかったのです。後になって、私はその出来事を顧みて「まだ、まだ、まだ」といって厳しく剣道などの稽古をつけてくれる師匠の心を連想します。孔子の「憤せずんば啓せず、排せずんば発せず」とはこれかなと初めて目を開かれ「一隅を挙げて、三隅を以て反さずんば、復せざるなり」という、師たるものの姿を思い起した次第で

す。（この時程、英語の音が日本語の音と全く異なるものである。だから仮名でも、ローマ字でも、英語の音を現わし伝え得るという誤想は、根本から打破されなければならない、ということに目醒め、目からうろこが落ちた感を経験したことはありません。）

とはいうものの、矢張り考えて見ますと、神田はかなり小供達の語学に心を痛めていたのでしょう。ある時は、——それは日露戦争後印度から優れた学生や学者の来訪が多かった、その1人の体験談に刺激されてのことと思いますが——「夕食の間小供も英語で話すことにしよう。反くものには御飯をあげない」というようなことをいったことがあります。それは3日と続くことではありませんでした。

父の賜物として忘れ難いのは、英語の訓練のためまた恐らくは（彼自らの場合のように）生涯の力、人生の糧となるような思想に触れさせるため、数少なくはありますが、英詩などを暗誦させられたことあります。それはロングフェローの「村の鍛冶屋」とリンカーンの「ゲティスバーグ・アドレス」などでした。その暗誦を、厳格に懇切に教えられ、繰返しくりかえしリサイトさせられたのです。

思えばoの字の色々な発音は、この詩の暗誦で、かなりきびしくたたき込まれていた筈のものでした。

Each morning sees some task begin  
Each evening sees it close  
Something attempted, something done,  
Has earned a night's repose

そこに、oの [ɔ], [ʌ], [ou] や、又次のヴァースではむづかしい [ɔ] の様々の形が一一教えられたのです。——（イタリックは筆者）

Thanks, thanks to thee, my worthy friend,  
For the lesson those has taught!  
Thus at the flaming forge of life  
Our fortunes must be wrought;  
Thus on its sounding anvil shaped  
Each burning deed and thought.

こう顧みると、先きに述べた *moral* を仮名式に発音して、意識的努力を欠いていたことは、何と

しても私の不覚で「三隅を以て反さず」の謗を免れません。

父はアマスト大学の2年を終えた頃にシェクスピアの「ジュリアス・シーザー」のマーク・アントニーの演説か何かの暗誦で、オラトリの賞を受け、ケロッグ・プライズのメダルというものをもらったことがあります。(それこそシーラー先生の御蔭といふべきでしょう)。そういう経験から暗誦の意義を感じたものか、中学の頃の私に前記の外に、自ら書いた「エイブラハム・リンカーン」という一文を暗誦させ、又 E・ケロッグの作“Spartacus to the gladiators at Capua”という一編を暗誦させました。これは、私なりに解釈しますと、独り発音の根本の訓練であったのみでなく、同時にまた英語の構造の勉強、文型の練習への手ほどきの意図が含まれていたのではないかと考えられます。所詮は、有用な言語材料を使いこなし、自分の口で自らの考えを表明することを目標とするという意味で、オラル・アプロウチの方向への努力が企てられていたかと思われまふ。

以上父からの賜物の想い出を昔し話しのようになしましたが、二三の感想を附言しますと、極めて大雑把な意味に文型という字を使えば、暗誦に限らず文型の習得は、平素の談話や読書を通してでもなし得られると思います。英語と日本語の構造の差異、進んでは東西両洋間の認識の方法、観念の構成に存する相違などの根本問題は真剣に攻究さるべき重要事ではありますが、(それは姑く措き) 私は手近の問題として、われわれが日本人としての考えを如何にして有効に表現し、国際的にも相手方に理解徹底せしめ得るかという課題に、意識的に立向いたく思います。その目的に向って、英語の語法、字句、文章の構造等、また背後の文化的伝統や前提観念までの修得が望ましく、そのために、自家の思想の表現に役立つべき英語の文型と認められるものを意識的に把握し、身につけることがよいのではないかということ、私は示唆したいのです。

そのような思想の表明、見解のいい表わし方に役立つ材料と私には思えた一二の文例を申しますと、何れもローズヴェルト夫人が折にふれて書き残した感懐の表明ですが、一つはさきの大戦の末期にガダルカナルの戦跡をたずねたときの言「大戦の激戦

の跡を各所に訪う度に、人類が、将来、紛争の解決に力に頼ることを一掃し得るよう、人間の霊の向上のために、心の裏に祈るのみであった」という簡潔の文字は、彼我共に抱懐し相續つ普通思想の見事な達意の表現として、記憶に価すると思われまふ。

“On Guadalcanal, as in many other places, I said a prayer in my heart for the growth of the human spirit, so that we may do away with force in settling disputes in the future” (*This I Remember*, p. 308)

又同夫人が1953年に広島を訪うた時の感想「戦争を防止し、国民の覚醒を来らすため、また国連を通じて齎し得るような調節を図ることのため、各人一層の献身を誓うことが、われらのとり得る唯一の道と思われる。広島に来て思えば思う程、ただいい得る所は、神よ将来には人類に優れる叡智を恵み給えということである」という一文は、自他の別ない深い感念の流露として役立つものといえるでしょう。

“So it seems to me the only really helpful thing we can do is to pledge ourselves to strive for the elimination of the causes of war and for the greater awareness of the people, and to bringing about some arrangement as can only be made through the United Nations.... As more contemplates Hiroshima, one can only say God grant to men greater wisdom in the future.” (“My Day”, in *Mainichi*, June 19, 1953)

パターン・プラクティスということから話しは脱線したようですが、実は上述した所と同趣旨のことを私は先年、フルブライト留学の方々の送別の午餐の席で、何かの御参考にもと思い申述べたことがありました所、それは誠に舌たらずで、自分の主張を裏切る不徹底な話に終わりましたので、償いの心も含めて申し添えました次第です。

さて、余白を充たすような意味で、再び神田の思い出に戻りますと、父が死に臨み、最後に述べた言葉は *Transition—Death is not the end* でありました。(浅学の私は、傾倒もしていたのでしょう、あわ

てるのみで、市河先生にロングフェローの詩 *Resignation* から、と教えられて、初めてわかったことを、今でも覚えています) 淡々として詩人の語をかりて、平凡な自分の信仰をのべた、それは父らしいやり方であり、そこにまた彼の身上も、限界も見出されるように思われます。

父の古いデスクの上にあったものは、自筆の「村の鍛冶屋」の

Toiling,—rejoycing,—sorrowing,  
Onward through life he goes,

以下の12行でした。これも何の変哲もない1人の働き人の心事でした。(更に彼には、藤村の老いたる鍛冶の歌った「宝はあわれ砕けけり」の痛嘆さえあったのだ、と私には思えます)

なお、パターンの連想として、軽い思い出話をつけ加えますと、私は英文の紹介状の書き方を、専ら神田とその学友で私の恩師であるジェームソン博士とが、私のために書いてくれた幾通かの紹介状を手本として、見よう見まねで覚えたのでした。私の一生の間に書いた紹介状は、凡て結局この両者の文型を出ないものであったと思います。

私は、パターンは人に自由を齎すと考えるものです。暗誦も文型の練習も、模倣ではなくして、創造するための言葉の習得ではないのでしょうか。

も一つの思い出として、父が英語のテーブル・スピーチの文型を特に私のために、渡米に先だちディクテートしてくれたことがあります。それは、私がはからず東大のいわゆるヘボン講座通称米国講座の担当者として、留学する事情を考慮しての父の思いやりからでもあったでしょう(東京横浜間の電車の中の出来事で、私は持ち合せた便箋に鉛筆で書き留めました) 渡米後約2ヵ月、偶々アマスト大学の卒業式を見物しました際、父の卒業後40年の同窓のリュニオンに私共も招かれましたが、その食卓で不意に幹事役のジェームソン博士から何か話すようにといわれたときに、件の鉛筆書きを思い出して、辛くも難場を逃れたのでした。そのとき程私は、父に助けられたという思いをしたことはありません。私はまたふと、これからは敵の武器——現代の技術——を取って戦うことが必要なのだろうという考えを頭に思い浮べました。(凡そ型の会得は人生の活動を助けます。——或る学者が

宴客となった食卓で、食前の祈りを頼まれて、厳かに始めはしたもの、結びの型を知らなかったため蜿蜒として、主客共に苦しむ中、遂に *Yours truly* といって止めたという、アメリカの一口話があります。所で、前述私のの処女演説は型の葉のききすぎともいえましょう。翌日のスプリングフィールド・リパブリカン紙が、アマストのコメンメントの雑報の中で、これに言及し *He spoke modestly like his father* とか何とか書いたようでしたが、何ぞはからんでそれは正に他ならぬ父の言葉そのものの反覆であったという、かくれたジョークがあったのでした)

終りに、先年英国の Father D'Arcy が訪日の際語学教育改善の計画につき話しかったことがありましたが、この語学に堪能な老師は、涙を伴わぬ語学の修得法は考えられぬと結論していました。私もまた、改善された教育法を強く礼讃しながらも、一面に涙と汗なき英語はないと強調したいのです。学問に王道なしとはここにもあてはまる格言と思われる。(神田乃武二男、東京大学名誉教授)

---

### 米フルブライト英語教員来日、1年間各地 の中学校に配属

在日合衆国教育委員会(フルブライト委員会)の計画による米人数員名が日本の中学校で英語を教えるため来日した。これらの米人数員はそれぞれ任地に出発したが、北は秋田南は鹿児島までの各地で約2,000人の中学生に1年間英語を教える予定である。

この計画は1953年開始いらい総計82名の教員が米国から日本に来て英語を教えたが、これらの教員は中学教諭としての任務を果たすほか毎年中学教諭のために開かれる英語教員セミナーに参加することになっている。1行9名の氏名、米国での所属校、日本での配属校はつぎのとおり。

△ ハロルド・W・クラウチ(カリフォルニア州サンホセ州立大学) 鹿児島大付属中学

△ ジェームズ・E・ヘンダーソン(ワシントン州シアトル、シャプルズ中学) 富山大付属中学

△ リチャード・D・キープズ(コネチカット州ニューキャナーン、ニューキャナーン高校) 東京教育大付属中学高校

△ ジョン・C・キムラ(カリフォルニア州ロサンゼルス、イースト・ロサンゼルス大学) 福島大学付属中学

△ ヒロシ・ナカムラ(イリノイ州シカゴ、イングルウッド高校) 信州大付属長野中学

△ ミス・メリー・エリザベス・モラー(カリフォルニア州グレンドラ、グレンドラ高校) 奈良女子大付属中学

(時事通信、9月8日)

## RECENT LINGUISTICS AND THE TEACHING OF ENGLISH

Archibald A. Hill

### (Continued)

In grammar, a very fundamental difference between English and Japanese is the presence of concord in English, and its total absence in Japanese. The presence of concord — that is, the fact that English verbs occur in strict correlation with number forms in nouns and pronouns, is often said to be a mere vestige in English, and historically the statement is true. Yet even if true, concord is still a very important vestige in English, so that disregard of it by producing sentences like:

“John run.” or “Mary like to read book.” gives a very foreign impression, and on occasion makes for misunderstanding. Conversely, the fact that Japanese verbs can be modified through a series of forms like a desiderative, a negative, or perfect, and so on without any required changes elsewhere in the sentence, makes Japanese verbs seem not properly verbs at all, at least to unsophisticated Western students. Contrastive studies in vocabulary have lagged behind those in phonemics and grammar, for the reason that vocabulary is largely a mass of discrete items where it is very hard to make generally applicable and structural statements. There is one area of vocabulary study, however, where structural studies have a long and honorable history — the studies of contrastive kinship terminology carried on by anthropologists for more than a century. A simplified statement of results would be that Americans must seem very lacking in social discriminations since we make none of the differences between forms for *mother* like the Japanese *haha* and *okasan*. Yet we have many other forms, *mama*, *mom*, *ma*, and so on, and the difference between them is

sharp enough so that use of the wrong one could be quite embarrassing. The difference in English depends essentially on the formality or informality of the discourse — not on the relation of the speaker to the person spoken of or to, as in Japanese.

Grammar and vocabulary are perhaps not markedly susceptible to structural drills, once the contrastive differences are known and have been explained to learners. But at least to adult learners the explanation of such contrastive structural differences is intellectually interesting, and so furnishes a stimulus for learning. By and large, the adult learner compensates by intellectual comprehension for his loss of the ease in mimicry which characterizes the child, consequently intellectual appeal, so long as it is relevant, is important to the adult student. Yet at least in a negative direction there is one important and very rigid principle which must be followed. For grammatical forms, or for anything else like numbers, days of the week, or names of the months, which go in a fixed order, it is imperative that the fixed order be broken up and randomized in drills. Otherwise the student will find himself forced to start in at the beginning of the series and run through relentlessly until he finally reaches the form he wants — by which time the conversation has left him far behind. We can all remember, for instance, our difficulties in mastering the days of the week in our own language study. Usually we could run through Monday, Tuesday, Wednesday without trouble, and even Sunday, Saturday. But if you were like me, you always got stuck on Thursday and Friday.

As for teaching of contrastive vocabulary,

at present the best method seems to be explanatory notes in readings and dialogues, since, as said earlier, there seems to be little that can be said about general vocabulary structure. But at least some things can be said about the writing of such notes. They should be realistic, taking into account the actual facts of usage, not an unreal statement of what usage ought to be. I remember at least our textbook for learners of English which had a note warning against the split infinitive. Since the note itself admitted that native speakers split infinitives — forms like “to really try” — the offense is not very bad, since any time a learner makes same “mistakes” as a native, he is talking like a native. For the importance of a realistic attitude towards grammar and vocabulary notes, I can do no better than point to the long series of studies of usage done by students of Professor Fries at Michigan — studies which have routed all but the most deeply entrenched of the purist forces. Vocabulary note should also be studied systematically, to see whether or not they are actually needed by the student, or whether they are thoughtlessly put in because traditional, or because the editor finds them easy to write. I found once in a single chapter of a book of readings for foreigners a good example of an unnecessary note and an equally good example of a needed note which was omitted. The unnecessary note was on the meaning of dollar, “a coin containing a hundred cents.” In the post-war world, I doubt if there is anyone anywhere who does not have pretty full knowledge of the dollar. The omitted note was on “English book” — meaning a book for a class in English. The needed note would have pointed out the difference in stress, not shown at all in spelling, between this form and the other combination of English and book which means a book in English or from England.

It is in syntax, however, that contrastive studies and drills based upon them have the

greatest importance. In large part, the importance of syntax, and the ways in which it differs from language to language has been known and exploited for some time. A striking difference between traditional grammars which follow methods of the last century and any reasonably good modern grammar is that the traditional grammar gives chapters devoted to conjunctions, verb forms, interrogatives, and so on, but only incidentally takes up sentence types. Any modern grammar is apt to have chapters devoted to headings like positive and negative questions, in which complete sentences are introduced as models for the learner to vary in accord with one of the most basic of linguistic facts — that any sentence is a substitution frame in which each position or slot can be filled by a large number of different items without changing the structure of the sentence as a whole. Consequently one of the most important types of drill is the complete sentence given to the student, for him to vary one item at a time upon command. There is only one word of caution to be given about this type of drill, and that is that students and teachers are only human beings, and human beings find repetition wearisome. Yet unless the whole sentence is repeated — even to the point of boredom — a large part of the virtue of the drill is lost.

There are two closely related forms of drills in syntax, based on the fact that any sentence can be thought of as a sequence of fixed slots which may be variously filled, even left empty. For the first type, the kind of drill which is an exploitation of substitutability, the usual name is “Pattern Practice” — almost the trademark of Michigan materials. A typical example of pattern practice and the way it can be used to build up knowledge through successive stages of complexity, is this passage from the 1960 ELEC Summer Seminar, 1960, first Year, Chapter two:

a) Repetition through Single Substitution

If the pattern “This is . . .” is to be

memorized and firmly established as a new speech habit, a sentence like, 'This is a dog.' is presented as a model or kernel first and then the learner is asked to substitute 'cat' or 'lion' or 'tiger,' etc. for 'dog' in the model by the teacher's cue. This kind of drill goes on for some time, so that the learner may be able to produce the pattern automatically and unconsciously even when his attention is centered upon the lexical items to be substituted.

Substitution is, at the beginning . . . of a simple kind. We don't for a while ask the learner to substitute 'animal,' for example, for 'dog' because [then] the learner has to change 'a' into 'an' at the same time, which may be rather complex. . . .

This is a dog.	This is a <i>dog</i> .
cat	This is a <i>cat</i> .
lion	This is a <i>lion</i> .
tiger	This is a <i>tiger</i> .

b) Repetition through Double (or more) Substitutions.

When the learner has been fully acquainted with the pattern "This is a . . .," then he may be asked to produce the pattern 'This is an . . .' as well . . . The cue *animal* is given . . . The slots to be substituted are two places in this case. . . .

This is a dog.	This is a <i>dog</i> .
cat	This is a <i>cat</i> .
animal	This is an <i>animal</i> .

A second form of substitution drill consists in building up longer and longer sentences, by successively filling the empty slots. This form of drill is of course also found in Pattern Practice drills, where it is instructive to note that the next drill after that which I have quoted from the ELEC Seminars is one in which first single modifiers are added to the pattern "This is a . . . ." giving:

big      This is a *big* dog.

Then next, two modifiers:

not      This is *not* a *big* dog.

The interesting thing in this last drill is that a difficulty in syntax is met, and neatly side-stepped. A simpler pattern would have been one which added a second modifier immediately before the first, as in "This is a *very big* dog." The order characteristics of *not*, which occurs before the article, is far more easily handled simply by drilling on it until it becomes a habit, than it would be by rule or explanation.

The purest form of expansion drill, however, has been called the pyramid drill. It consists in starting out with a single form and adding to it until a long and relatively complex sentence has been reached. Characteristically the drill is material for memorization and choral repetition, not a drill in which the teacher gives a cue and students give a new response. Here is a typical pyramid:

John  
 Old John  
 Little old John  
 Poor little old John  
 Poor little old John ate  
 Poor little old John ate pie  
 Poor little old John ate apple pie  
 Poor little old John ate apple pie greedily

This form of drill is less used than the cue-and-response form found in Pattern Practice. Yet it is a form that has value, and has been tested in experience. Thus a course of instruction for foreign air-force trainees devised by Professor Haden (who is known to patrons of ELEC) and Lehmann at Texas consisted initially of nothing but pyramids for memorizing. When a large number had been memorized, the students had a workable store of models which they were able to vary so that it was clear they had acquired a good deal of English.

The most interesting and exciting — some would even say exasperating — event in recent linguistics has been the emergence of transformational theory and analysis. There are two

main centers of it, one at the University of Pennsylvania under Zellig Harris, and the other at Massachusetts Institute of Technology under Noam Chomsky. The difference between the two schools can be roughly stated as being that between reversible relationships which Harris is working with, and non-reversible, one-way derivations which Chomsky is exploring. There are difficulties, controversial elements, perhaps even fallacies in current transformational theory, but it is certain that it will have a tremendous and salutary effect on language teaching, in just the area we have been describing, the teaching of syntactic patterns.

I do not wish even to attempt a summary of all of transformational theory, but a main tenet of it is that language has two levels. The first level is a set of simple kernel sentences, which are presumably learned first, more or less as set patterns. From these the rest of language, the derived and more complex sentences, are constructed by a set of operations called transform. The application of transforms requires that the kernel sentences be fully analyzed and their items identified by the speaker, else of course, he will misapply the transforms and produce nonsense. A part of the controversy over transform theory is the nature of the analysis of kernel sentences proposed by transformationalists, which seems to many linguists excessively limited to forms identified by spelling, and to make little use of modern linguistic analysis and its basic belief that language is sound. A second difficulty is that there is as yet no satisfactorily worked out criterion for what sentences go into the kernel group, and what into the derived group. It seems certain, however, that the criterion will have to be operational simplicity, so that it is probable that this latter difficulty will be solved in time.

A chief value of the transformational point of view in language analysis is one which, ironically enough, the transformationalists usually

deny. It is that transformational formulae are dynamic — they are the operations which the native child learns to master as skills which enable him to make all the appropriate responses which he will use throughout his life. It is thus a grammar with a strong slant towards production, and so toward the speaker. It does not have, as current phonemic and morphemic theory has, a slant towards recognition of physical events as an instrument of decoding — that is, a slant towards the hearer. With understandable enthusiasm transformationalists deny a slant toward the speaker, since they maintain that their grammar is the only right one, and includes hearer and speaker. I for one, feel sure that transformational grammar will merely complement traditional linguistics, not contradict it, and that therefore one of its principal values is the very slant toward the speaker which at present is denied. It is, to be direct, this very slant which will make transformations a useful tool in language teaching.

What are the profits for the language teacher, at the present moment, from acquaintance with transformational theory? It seems to me that there are mainly three, all easily adaptable to current methods, none unduly revolutionary, but profitable. First, even though transformational analysis are very far from having completed their analysis of any language, it seems clear that we can expect the transformational structure of languages to differ. There is thus a whole new field now open for contrastive study. Notice the difference in the construction of certain types of questions in Japanese and English. The probable kernel is about the same in both —

Today is (a) beautiful (day).

But the question form is in Japanese:

Kyoo wa ii otenki desu ne?

While in English, we must balance the positive statement with an empty negative one:

Today is a beautiful day, isn't it?

The Japanese transform seems, oddly enough, a good deal closer to the corresponding form in Spanish, which merely adds a particle *no* to the positive, just as Japanese merely adds *ne*. The different transformational relationships would seem to explain at least in part why Japanese are puzzled as to how to answer English questions in this positive-negative form.

Second, while transforms have always been described in any good grammar — I know of none for instance, that do not tell the student how to derive a question from a statement — transform theory emphasizes the close relation between whole sets of related sentences, which pretty well make up the syntax of every language. From a simple sentence like:

John shot a rabbit.

we can derive question, negative, negative question, passive, negative passive, passive question, negative passive question, and many more. When we have done so we have surely threaded our way through a lot of the grammatical maze. As a result, transformational theory suggests the great importance of treating the whole body of related sentences together systematically, in operational drills, once the parrot-like memory drills for kernel sentences have been mastered.

Finally, the third value is that transformational theory makes use of symbolism which is readily adaptable to drill purposes and will prove useful. Indeed it has already been tested in classroom use and shown to be useful. Professor DeCamp at Texas, for instance, has made extensive classroom use of modified transformational symbolism. Here is an example: for transformational purposes we can analyze the sentence below this way —

John can drive a car.  
 N     v     V     NP\

That is, N equals noun, v equals auxiliary verb, V equals main verb, NP equals the phrase made

up of noun and article, and \ equals the pattern of pitch and double cross juncture which ends the sentence.

To describe the way this can be made over into a question, we give the double formula:

$$N \vee V NP \searrow \rightarrow v N V NP \left( \begin{smallmatrix} \searrow \\ \nearrow \end{smallmatrix} \right)$$

This new set of symbols has the following set of meanings:  $\rightarrow$  equals "change into" and  $\left( \begin{smallmatrix} \searrow \\ \nearrow \end{smallmatrix} \right)$  means "use either falling intonation and double cross or rising intonation and double bar." The resultant question is then

Can John drive a car?

with either question or statement intonation. In drills, the device is put visually before the student as a guide, and the teacher then gives the command to make the modification. The device is not a miracle worker, but it helps.

Actually the statement that this new device is not a miracle worker is an important one. The history of linguistics has been the history of discoveries which have each seemed to destroy past formulations completely, and to solve all problems. For instance, regularity of sound change, phonemics, information theory, and now transformational analysis, each has been hailed as the dawn of a new day after immemorial night. Yet each innovator has eventually had to recognize that light existed before his particular dawn, and that linguistics like all science is cumulative, each new structure built on those which precede it. And often and properly the test that brings saner estimation of claims all too easy to exaggerate is what happens in the classroom. I think that language teaching and language teachers are often the test and testers of new theories, who find both confirmation of what is useful, and integration with what has been useful in the past. May they always continue to be so.

(Concluded)

## 最近の言語学と英語教育

テキサス大学教授

Archibald A. Hill 著

ELEC 主事

松下 幸夫 訳

### (つづき)

文法においては、英語と日本語の間の基本的な差異は、英語には concord (一致、呼応) があり、日本語にはこれが全然ないことである。Concord があるということ、すなわち英語の動詞は名詞及び代名詞の数と厳密に相関して現われるということは、英語においては、単なる名残りにすぎないとしばしばいわれている。そうして歴史的にはそのいい方は正しい。しかしそれはそうであるとしても、concord は、やはり英語における重要な名残りである。従って “John run.” あるいは “Mary like to read book.” のような文をいうことによってそれを無視することは、非常に異国的な印象を与え、ときによれば、誤解を生ぜしめる。反対に、日本語の動詞が、文中の別な箇所において何らの変化を要しないで、願望とか否定とかあるいは完了などによって修飾されることがあるという事実は、少なくとも初心な西洋の学徒にとっては、日本語の動詞は正しくは全く動詞といわれないうに思わしめる。語いにおける対立研究は、音素論や文法におけるそれよりも立ち遅れている。その理由は語いは、おもに、ばらばらの項目のかたまりであって、一般にあてはまる構造的な説明をすることがたいへんむずかしいからである。しかし構造的な研究が長い立派な歴史をもっている語い研究の1つの領域がある。すなわち一世紀以上にわたって人類学者達によって行なわれてきた近身者に対する呼称の対立研究である。結果を簡単に説明すると、アメリカ人は、*mother* に対して、日本語の「はは」と「おかあさん」のようにいろいろな形での区別をしないのだから、社会的差別に非常に欠けているように思われるということなのである。しかしわれわれは他の多くの形をもっている。たとえば *mama*, *mom*, *ma* などである。そうしてそれらの間の差異は非常に鋭敏であって、もし間違えて用いると全く困惑をきたすことになるのである。英語における差異は、談話が正式の言いかたであるか、くだけた言いかたであるかということに本質的にかかっているのであって、日本語の場合のように、話し手と、話題にのぼっている人又は話しかけている相手との関係にかかっているのではない。

文法と語いとは、おそらく、ひとたび対立的な差異が学習者に説明され、理解されたならば、それ以上は構造的練習にあまり適していないであろう。しかしすくなくとも成人の学習者にとっては、そのような対立的構造研究の説明は、知識として興味があり、学習の刺激となるものである。模倣が上手であるということが子供の特徴であるが、これにくらべ成人はたやすく模倣する能力を失っているものだから、一般に、成人の学習者はこの欠陥を知的理解で

補うものである。従つて知的に訴えることは、それが行き過ぎにならないかぎり、成人の学習者には重要なことである。しかし、少なくとも否定的な指示の形で、ではあるが、だれもが従わなければならない1つの重要な、極めて厳格な原則がある。文法的な形態の場合や、あるいはそのほか、数とか曜日や月の名称などのように一定の順序で出てくるものの場合には、いつでも、練習にあたっては、必ずこの順序をばらばらにし、無作為のものにするということが絶対に必要なことである。そうしないと学習者は、自分が欲する形がすぐにでてこないの、一連のものの最初から出発して、自分の欲する形に行きあたるまで、しゃにむに押しすすめていかなければならなくなる。そうして行きついた頃には会話はすでにずっと進んでいて彼はあとにとりのこされてしまうことになる。たとえば、われわれは皆、われわれ自身の国語の勉強の際に、曜日の名称を習い覚えるのに困難を感じたことを記憶しているであろう。通例われわれは、月曜、火曜、水曜ぐらいまでは何の苦もなく言えるであろう。さらにまた日曜と土曜も言えるであろう。しかし、もしあなたがたが私と同じようだとすれば、あなたがたは、いつも木曜及び金曜のところで行きづまってしまうであろう。

対立的語いの教授について言えば、今までのところ、最良の方法は物や対話に解説的脚注をつけることであるように思われる。前にも述べたように、一般的語い構造に関して言えることは少ししかないように思われるからである。しかしすくなくとも、そのような脚注を書くことに関して何らかのことがいえる。それらの注は、実際の慣用法 (Usage) を考慮して、事実即したものの、すなわち Realistic でなければならない。決して慣用法がどうあるべきかというようなことを、事実を無視して、述べるものであってはならない。私は、英語の学習者のための教科書で、split infinitive に対して、その使用を戒めた注がのっていたのを少なくとも1冊だけ覚えている。注それ自身も、英語を母国語として話す人々の間でも infinitive を split する。すなわち “to really try” という形態のように to と try という動詞の原形の間に really という副詞をわり込ませて to try という infinitive を引き裂いてしまうことを認めているのであるから、infinitive を split (裂く) することはあまり悪いとはいえないのである。学習者が母国語として話す人々と同じ誤りをするときはいつでも、彼はすなわち、母国語として話す人々のように話しているのであるから悪くないわけである。文法及び語いの注に関して事実即した態度をとることの重要性について言えば、私はフリーズ教授の学徒た

ちによって、ミシガンにおいてなされた長い一連の慣用法に関する研究のことを指摘するのが一番よいと思う。すなわちそれらの研究は、伝統的な古い文法の考え方を固執する、いわゆる純粋派の根強い力をすっかり追い出したのである。語いの注はまた系統的に検討されるべきである。すなわちそれが学習者にほんとうに必要とされるものであるかどうか、あるいはたいした考えもなしに、ただ従来の慣習の惰性で入れたり、編者がただ書きやすいからというだけで入れたりしたものでないかどうかよく検討されるべきである。私はかつて外国人のための読みものの本の中のある章において、不必要な注のよい例と、必要なのにしかもはぶかれている注のよい例とを見付けたことがある。その不必要な注というのはドルの意味についてであった。すなわち「100セントの価値の1つの貨幣」という注である。戦後の世界においてドルについてかなり充分な知識を持たない者がどこかに誰がいるなどとは疑わしいと思う。はぶかれていた注というのは——英語の授業のための本ということの意味する場合の“English book”についての注である。この場合必要な注は、この形と、英語で書かれた本又はイギリスの本という意味の場合の English と book との結合の形との間の stress (強勢) のおかれる位置の差を指摘することである。しかもこれは spelling (綴り) のうえでは全然現われていないものであるから、いっそう注の必要が考えられるのである。

しかしながら、対立研究や、それに基礎をおいた練習が最も重要なのは、統語法 (syntax) の場合である。統語法の重要性については、及び言語が異なれば統語法もそれぞれ異なるということ、その異なり方については、これまでに、大部分は知られており、その知識がいくらか前から利用されている。前世紀の方法を踏襲する伝統文法と、合理的な良い現代文法との著しい相異は、伝統的文法が、接続詞や動詞の形態や疑問詞などに多くの章をさいて、文型については、ほんのついでに、ちょっとふれるにとどまっているということである。現代文法は、肯定疑問及び否定疑問というような見出しに対して多くの章をあてる傾向にある。そこでは、学習者に対して完全な文が範例 (models) として示され、言語における最も基本的な事実——すなわちいかなる文も1つの代入できる枠 (a substitution frame) であって、その枠の中では各々の位置あるいは充填箇所 (slot) が、全体としての文の構造を変えることなしに、多くの異なった項目によって充たすことができる。従って最も重要な種類の練習の1つは、生徒に完全な文を与えて指示に従って一時に1項目を変えさせることである。この種の練習をさせるにあたって一言注意しなければならないことがある。それは、生徒も教師も所詮は人間である以上反覆はうんざりするだろう。しかし文章全体が繰り返えされなければ——飽き飽きする程度にまで反覆されるのでなければ——この練習の価値の大部分は失われる。

統語法 (文構造) の練習には、いかなる文も、いろいろに充たしたり、あるいは、空けたままにのこしておいたり

することのできる決まった充填箇所の1つの系列であると考えることができるという事実に基づいて、互に密接に関連する2つの種類の練習がある。第1の種類としては、代入できるという性質を利用する練習の方法であるが、普通“Pattern Practice”という名称で呼ばれているものでほとんどミシガンの教材の商標のようにになっているものである。パタンプラクティスの典型的な例で、簡単なものから段々複雑なものへ次第に段階を追って続けていくことによって知識を築きあげていく方法としては、ここに1960年度 ELEC 夏期講習会教材の初級コース第2章からの1節をあげる。

#### a) Single Substitution (1箇所代入) による Repetition (反覆)

もし“This is ....”という文型を記憶させ、新しい言語習慣としてしっかりと確立させようという場合にはまず‘This is a dog.’というような文を model (範例) 又は Kernel (基本文型) として提示し、然るのち学習者に、教師の示す cue (手掛り) によって範例文 (model) の中の dog の代りに‘cat’とか‘lion’とかあるいは‘tiger’などを代入するようにさせる。この種の練習をしばらく続ける。そうしてその結果学習者は代入すべき項目に注意を集中している時でも、その文型を自動的に、無意識的に発表することができるようになる。

代入 (substitution) は、初めのうちは……簡単なものを行なう。しばらくの間、学習者に、‘dog’の代りにたとえば‘Animal’を代入させることを要求しない。なぜならば (もしそうすれば) 学習者は同時に‘a’を‘an’に変えなければならない、そのことはかなり複雑ことになるからである……。

This is a dog.	This is a dog.
cat	This is a cat.
lion	This is a lion.
tiger	This is a tiger.

#### b) Double (or more) Substitutions (2箇所あるいはそれ以上の代入による Repetition (反覆))

学習者がじゅうぶん “This is a ....” の文型に習熟してしまったときに、はじめて “This is an ....” も同様に発表する練習をさせる。

Animal という cue が与えられる。この場合には代入しなければならない箇所 (slots) は2箇所である。…

This is a dog.	This is a dog.
cat	This is a cat.
animal	This is an animal.

第2の種類の代入練習 (substitution drill) は、次々と空いた箇所 (empty slots) を充たしていくことによって次第次第に長い文を構成していくのである。この種の練習は勿論、またパタンプラクティスの練習においても見ら

れることである。その場合、私が ELEC 講習会教材から引用したものの次にくる練習が “This is a...” という文型にまず1つの修飾語 (modifiers) を付け加えるものである。たとえば:

big        This is a big dog.

次に、2つの修飾語:

not        This is not a big dog.

というようにするものであるということに注目することが大切である。

この最後の練習において興味深いことは、統語法上の1つの困難点に出合っていること、しかも、それがきれいに上げられていることである。もっと簡単な文型は、第2の修飾語 (modifier) を第1のもののすぐ前に付け加えるものであったであろう。たとえば “This is a very big dog.” のように。Not の語順上の特徴、すなわちそれが冠詞の前に現われるという語順上の特徴は、規則や解説によるよりも、むしろ、ただ単に、それが習慣となるまで練習させることによって、よりいっそう容易に処理することができるのである。

展開練習 (expansion drill) の最も純粋な形は、しかしながら、ピラミッド・ドリルと呼ばれてきたものである。それは、単純な形から始めて、それに次第に付け加えていって、おしまいに長い比較的複雑な文に到達するというやり方である。その特徴としては、この練習は記憶のため及び一斉に反覆させるための材料であって、教師が cue を与え、生徒が新しい応答をするという練習ではない。下に典型的なピラミッド練習の例を示そう。

John

Old John

Little old John

Poor little old John

Poor little old John ate

Poor little old John ate pie

Poor little old John ate apple pie

Poor little old John ate apple pie greedily

この型の練習は、Pattern Practice においてみられる cue を与えて反応させる型 (cue-and-response form) にくらべるとそれほど多く用いられない。しかしそれは価値ある型であり、経験の試練も経ている。かくして (ELEC の委員がよく知っている) Texas 大学の Haden 教授と Lehman 教授が考案した外国人の空軍講習員のための教授要項は、もともと記憶のためのこのピラミッド練習からできていたものに他ならないのである。多数のものが記憶されたならば、学習者は、それをいろいろに変えることのできるたくさんの範例を貯わえたことになるから、明らかに、彼らはかなり多くの英語を習得したことになるわけである。

最近の言語学界で——ある者はしゃくにさわるとさえ言うであろうが——最も興味のある、そうして人々を興奮させる出来事は、transformation (変形) の理論と分析の

出現であった。その理論の主な中心は2か所ある。1つは Zellig Harris にひきいられた Pennsylvania 大学であり、今1つは Noam Chomsky を主とする Massachusetts Institute of Technology である。2つの学派的相違は、大ざっぱに言えば、Harris が取組んでいるのは逆戻りのできる関係 (reversible relationships) であり、Chomsky が研究しているのは逆戻りのできないもの、即ち一方通行的な派生 (One way derivation) であるということである。現在の Transformation theory の中には困難点や問題点、またおそらくは誤謬さえも含まれているかも知れない。しかしながらこれが言語指導、特にわれわれが述べてきた領域、すなわち文型の指導に大きな有益な効果をもたらすであろうことは確かである。

私は Transformational Theory の総てについてその要約を述べたいとは思わない。しかしその主な主旨は言語は2つの水準 (level) をもっているということである。第1の水準は1組の単純な基本文であって、それらは、おそらく最初に、多かれ少なかれ、決った文型 (set pattern) として学習される。これらの基本文から残りの言語、すなわちそれらから派生した更に複雑な文が transform (変形) という1組の操作によって構成される。Transform を適用するには、基本文がじゅうぶんに話し手 (speaker) によって分析され理解されていることが要求される。そうでないと勿論彼は transform の適用のしかたを誤り無意味な文を発することになるであろう。Transformation theory に関して論議されることの一部分は、Transformationalists (変形理論を主張する学者達) によって提出されている基本文の分析の性質である。それらの基本文は多くの言語学者にとっては、文字によって表わされている形にのみ極端に限られているように思われる。そうして現代の言語学上の分析をほとんど利用していないし、現代言語学上の基本的な信条である言語は音声であるということをはほとんど用いていないことである。第2の困難は、どのような文が基本群に入れられるべきで、どんな文が派生群に入れられるべきかを定めるための基準がまだ満足にできていないということである。しかしその基準というのは操作を簡単にするためのものでなければならないであろうからこの困難はいずれはそのうちに解決されるであろう。

Transformation の観点からの言語分析のもつ価値の主なものは、皮肉なことながら transformation 派の人々が普通否定していることである。それは transformation の公式が dynamic (動的) なものであり、その言語を母国語とする子供が、一生涯を通じて用いるあらゆる適切な言語反応ができるように技能として身につける言語操作 (operation) だということである。だからそれは Production (発表) のほうに、そしてまた speaker (話し手) の立場に強く傾いている方法である。それは現在の音素論・形態素論のように解説の道具として物理的出来事の recognition (理解・識別) つまり hearer の立場には傾いていない。transformation 派の人々は、彼らの文法

が唯一の正しいものであって、speaker の立場も hearer の立場も含んでいるものであると主張しているもので、従って speaker の立場に傾いているということを強く否定しているのは了解できる。

私などは transformation grammar (変形理論の立場にたつ文法) は伝統的な言語学と矛盾するものではなく、それを補うものであり、従ってその主要な価値の1つは、現在は否定されているが、speaker の立場に対する傾きそのものであると強く感ずるのである。率直に言えば、この傾きのゆえに transformation は言語教育の有用な道具となるのである。

現在のところ、transformation 理論を知ることからどんな利益が、言語教育に携わる者にとって得られるであろうか。私は主として3つあると思う。そうしてそのいずれも現在用いられている方法に容易に適用できるものであり、不当に革命的なものではなくて、有利なものである。その第1のものは、transformation の分析学者は、どの言語をもまだ完全に分析できてはいないけれども、言語の transformational structure (変形構造) はその言語が異なればそれぞれ異なるものであるということを明らかに予想することができる。かくして今や対立研究のための全く新しい分野が開かれている。日本語と英語のある疑問形の構造上の相違を見てみるとよい。

Today is (a) beautiful (day).  
という文について言えば、おそらくその基本文となるものは日本語と英語の両方とも同じであろう。しかしその疑問形は日本語においては:

Kyoo wa ii otenki desu ne?

であろう。これに対して、一方英語では、われわれは肯定の叙述のあとに空虚な否定の叙述を付け加えて平衡を保たなければならない。すなわち、

Today is a beautiful day, isn't it?

日本語における変形 (transform) は、奇妙なことに、それに対応するスペイン語の形にかなりよく似ている。日本語が単に *ne* を付け加えるのと同じように、スペイン語では肯定文の終りに *no* という助詞を付け加えるだけだから。このように日本語と英語の transformation の関係が違っているということが、何故に日本人が英語のこの種の肯定—否定の形の疑問 (否定付加疑問文) に答えるのに困難を感ずるかという理由を少なくとも部分的に説明しているように思われる。

第2には、文の変形は、よい文法書ならどんなものでも取り扱っているが——たとえば学生に平叙文から疑問文をどうしてつくるかを教えないような文法書を私は知らない——しかし Transformation Theory は関連関係のある文のすべての間の密接な関係を重視するのであって、それがそれぞれの言語の統語論 (syntax) の大部分を構成しているのである。

John shot a rabbit.

というような簡単な文から、われわれは、疑問、否定、否

定疑問、受身、否定の受身、受身の疑問、否定の受身の疑問、など及び更に多くのものを引き出すことができる。われわれがそのような操作をするとき、たしかに文法的迷路の穴 (slot) を通して路を縫い進んでいるのである。その結果、一度おうむ返しのような暗誦のための drill をして基本文をマスターしたら、文運用のための drill では関連関係のある文全体を組織的に取り扱うことが極めて大事であることを Transformation Theory は示唆している。

最後に Transformation Theory 第3の価値は、それが練習目的のためにすぐに応用できる記号を利用することであり、そのことが役に立つことを示すことである。全くそれはすでに教室において用いて実験済みであり、有用であることが示されている。たとえば、Texas の De Camp 教授は Transformation 記号の修正したものを教室において広範囲に用いている。ここに一例を示すと:

Transformation の目的のために下のような文をわれわれは次のように分析することができる——

John can drive a car.

N v V NP\

すなわち N は noun のことを表わし、v は助動詞を、V は本動詞を、NP は名詞と冠詞とからなる名詞句を表わし、そうして \ は文を終結する抑揚の型とダブル・クロス (#) 接続を表わす。

これが疑問文に変形されるしかたを表わすためには、次の二重の公式をもって示す。

$N v V NP \setminus \rightarrow v N V NP \begin{smallmatrix} \nearrow \\ \searrow \end{smallmatrix}$

この新しい1組の記号は次の1組の意味を持っている。 $\rightarrow$  は「……に変わる」ことを示し、 $\begin{smallmatrix} \nearrow \\ \searrow \end{smallmatrix}$  は「下向調とダブル・クロス接続を用いるか、あるいは上昇調とダブル・パー接続 (||) を用いるかいずれでもよいことを示している。従ってその疑問文は、

Can John drive a car?

であって、疑問の音調又は叙述の音調のいずれかで発せられるものである。練習の場合には、これらの記号は、生徒の目に見えるようにして手引として役立つ。そうして教師は必要な変形をさせるように指令する。この工夫は奇跡を生むというほどの効果はないが、しかしたしかに役に立つものである。

事実この新しい工夫が奇跡を生むものでないという説明は重要なものである。言語学の歴史は、いずれも過去の理論を完全に破壊してしまっ、すべての問題を解決してしまいうように見えた新しい発見の歴史であった。たとえば音声変化の規則性、音素論、インフォメーション理論 (Information Theory) それに今度の Transformation 分析 (Transformational Analysis)、いずれも長い長い暗やみの後の新しい黎明として迎えられたのであった。しかしながらこれらの革新家はいずれも、ついには、各々のもたらした黎明の以前に明りはすでに存在していたのであり、そうして言語学はすべての科学と同じく累積的なもの

(43ページへ続く)

# 特集: 1961 年度 ELEC 夏期講習会

恒例の ELEC 夏期講習会は本年も、東京・石川会場 7 月

27 日、静岡・京都会場 8 月 14 日より各 13 日間にわたって

実施され好評裡に閉会となった。以下は本誌に寄せられた  
講習会への感想の一部である。

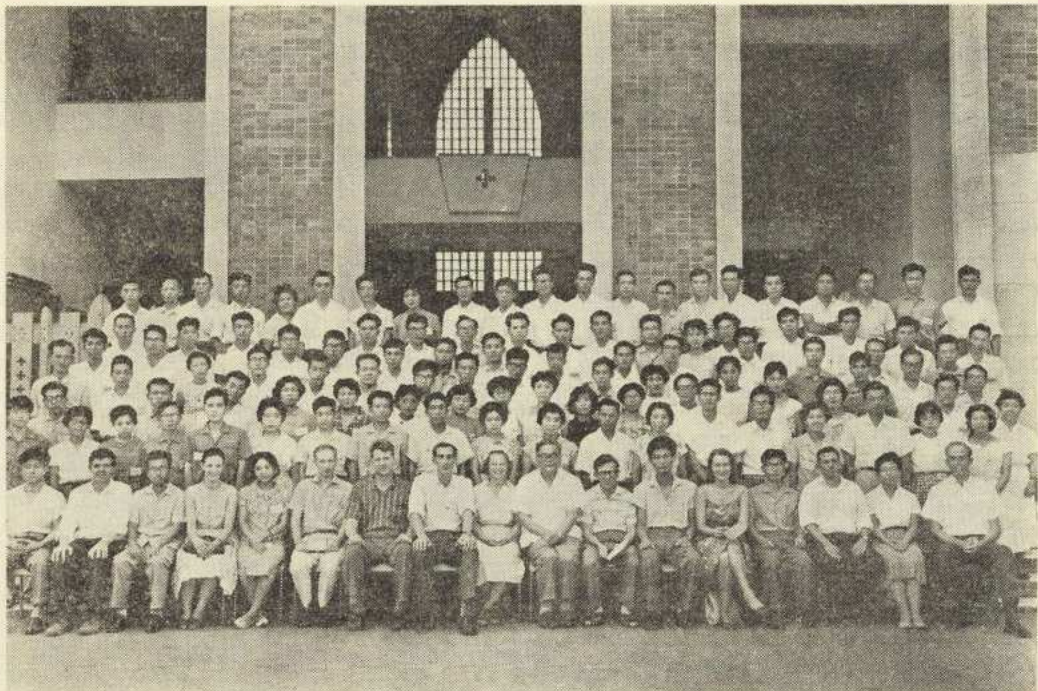
## 生きた英語とふれ合えて

熊本市立出水中学校 坂本 旭

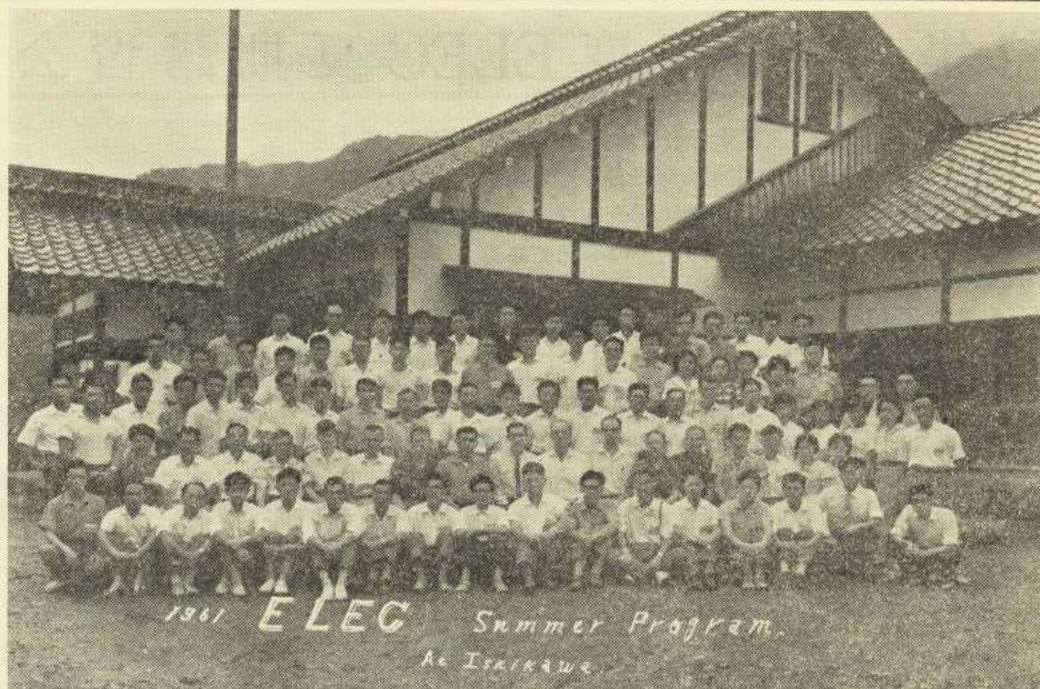
「一度は登れ、二度は登るな」このような言葉があったように思うが、とにかく参加して大いに勉強になった。先ず何よりも最初から計画に従って一貫した指導法を学び得たことが最大の収穫であった。簡単なことから同じ事を何度も繰り返すことによってそれが 1 つの型となって頭の中に memorize されることを今更ながら痛感した。しかも native speakers である外人 trainers のいわゆる生きた英語に 10 数日接し、親切な中にも severe な指導を受ける機会に恵まれたことが自己を眼に見えぬ中に大きく成長させてくれたような気がする。単語の個々の発音についても参考になったが、我々が日頃最も不注意でしかも不勉強な intonation について学びいわゆる英語特有の rhythm を幾分かでも体得出来たこ

とが嬉しかった。指導技術そのものについても practice-teaching の時間にあらゆる advice を受けて自己の欠点を発見することによって今後の現場の指導に大いにプラスしたと考える。これに writing や test を合理的に組み合わせて理想的なものにまた現場の客観性に相応したものにするのは今後我々に与えられた課題であろう。そしてその理想に少しでも近づくように頑張っていきたい。

最初から intensive な講習だと想像していたが参加してから 2, 3 日の間は酷暑も手伝ってかなりの疲労を感じた。しかしそうであったからこそ闘志が湧いた。今ペンを走らせながら 10 数日間が誠に実のはいった訓練学習であったことを感謝しつつ再び機会があればぜひ参加したいと思っている。そしてこれから参加されるであろうたかがたのためにも前記の『一度は登れ……』の諺を次のように改めて筆を置く「一度登った者は、二度登る」。



(京都会場)



(石川会場)

## ELEC 夏期講習会に参加して

新潟女子工芸高校 併設中学校 高岡 宏

つらい、つらいと皆が口をそろえながらも、やっとこの講習会を終ることが出来た。主催者および講師のかたがたに深い感謝の気持ちを表わしたい。今考えてみると、初日の会場へくるまでの道程がこの講習会の実際の姿を暗示していたようにも思える。徒歩10分の筈の道程はさにあらずして、急な山道が我々を待っているとは少しも考えていなかったのだから。

学校の先生がたも種々の講習会に出席されるが、この会ほどきたえられるものは他にないであろうと確信する。また他の講習会なら、生徒達に見せて我々の努力のほどを誇ることが出来るだろうが、ここでは、もし生徒達が見ていたらと思うと赤面せざるを得ないようなことがあまり多くあったと思う。intonation や pronunciation がたいせつであるとは常々考えていたが、実際に intonation のわずかな差が意味に意外な程の変化を与えるというのはそれ程知らなかった。発音の練習もさることながら、この intonation の勉強は思いがけない収穫であった。発音については始めからコンプレックスの種であるために何とかしなければと考えていても、intona-

tion にはそれ程注意を払わないためではないだろうか。そして10人もの異なる米人講師と接し得たということは以上の収穫を更に enrich させることであった。practice teaching は最も我々をなやましたことの1つであったが、延べ16回もの practice は我々を刺激すること大であった。自分の誤りからというに及ばず、他のかたの誤りからも自分に共通な誤りを見つけ出すことができた。Forum での体験談は我々の得た収穫を固定させるのに大いに役立ったと思う。ことに私の場合、中学・高校の両方を教えているために(高校の持ち時間の方が多い)多くのかたがたとは別な意味で得ることが多かった。ややもすれば、中学と高校では教授法がまったく違うと見られている向きもあり、それもあながち誤りとはいえない。その意味で中学の多くの優れた先生がたのお話を伺がい、新しい教授法を勉強することによって、高校での新入生の扱いに並びに高学年のクラス等において何か新しさを見出せるような自信を得た。

つらいうちに楽しいことは多くあった。recreation, trainers との話し合い等もそうであった。今はこれらすべてが皆一塊になっている。しかし日々の経過と共にそれらが次第にとけ合って、その各々が自ら定着する所を見出すことがあろうと信じて疑わない。

## ELEC 夏期講習への若干の不満

新 井

最初にこのセミナーを企画、運営された ELEC の関係のかたがた、直接我々受講生に熱心に指導助言してくださった講師のかたがた、アシスタントのかたがたに心からお礼を申し上げたいと思います。それと同時に夏休みといえども補習。校外補導のため休みのない私達のうち、この講習会に参加できたことは参加できたそのことに大きな意義がえられる思い、おぼろげながらもこのセミナーでつかんだ oral approach の一端でも他の参加できなかった同じ仲間の先生がたに伝え、24時間以上の重圧の中であえいでいる私達に少しでも効果的な指導法確立の一助としたいと思っています。

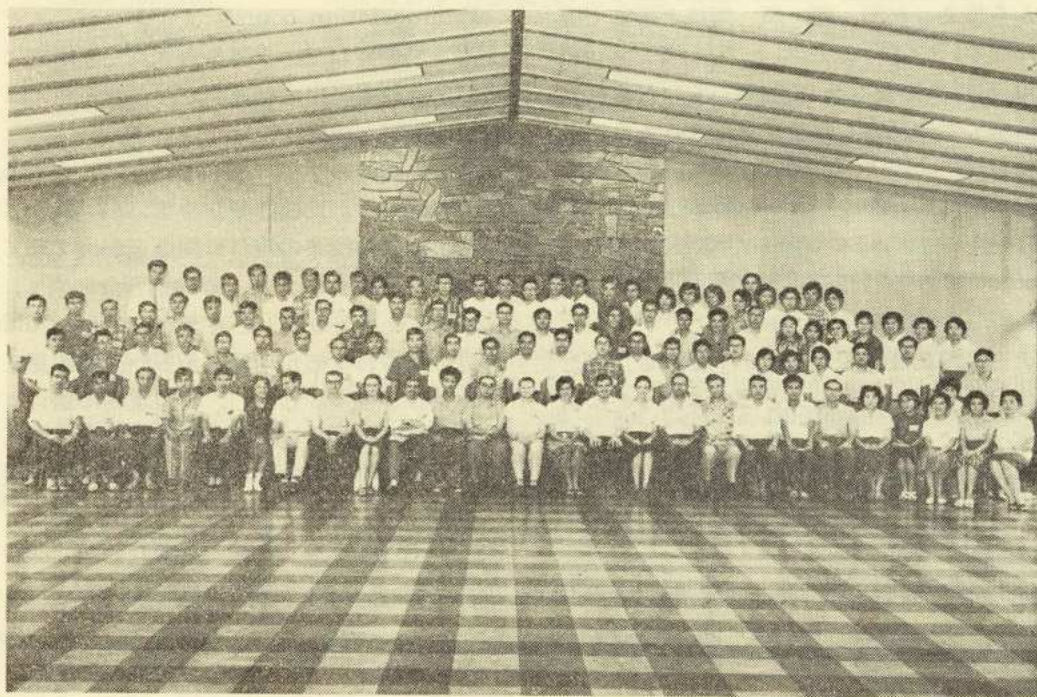
講習期間がわずか10日あまりと時間的制約のためお互いの疑問点、oral approach それ自体についてもはっきりした概念をつかめなかったことは大変残念に思っていますが、ぜひ来年度に2年生コース受講のおりには解決したいと1年間の宿題をもえたことは違った意味からの自分自身に対する励みであると思い自分の学習への道を大きく開くことのできた点は1つの収穫だと思っています。

日々の講習の点では、特に日本人に困難な発音の矯正、pronunciation course は最初に個人個人の困

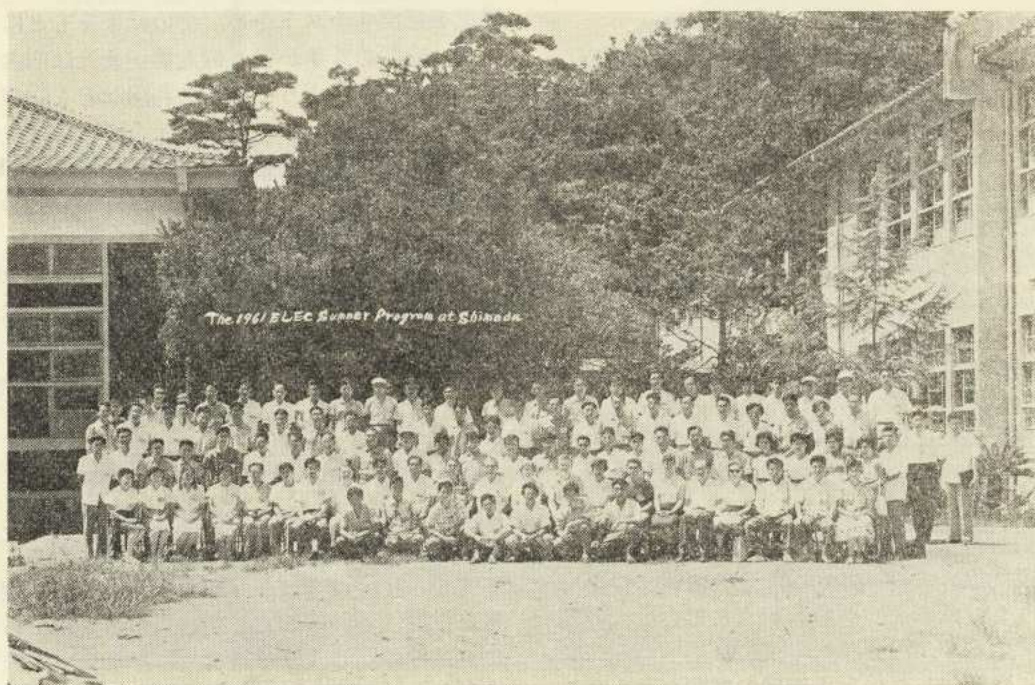
難点を見出すテストをし、その結果をもとにして集中的に時間の許すかぎり個人矯正または宿舎に帰っても練習できるようテーブの利用なども次回までに考えていただきたいと思います。つぎには先に述べたように私自身不勉強のため oral approach についてのはっきりした概念がつかめなかったのも、これは同じ部屋の他の先生にも同じようなことを感じていられたかたがいましたが、最初の orientation のおりに幾時間かこれに費して各受講生がはっきりした概念をつかみそれを practice teaching に生かせるようにして欲しいと思います。Evening activities にはもっと各先生がた喜んで参加しお互いに話し合えるプログラムになるようむずかしいことですが考えていただきたいと思います。

最後に講習会に来ていちばん強く感じたことは受講生の先生がたが、それぞれの府県市でももっとも研究心の旺盛な方ばかりであり、日々の日課はもちろん夜間、各ルームでも英語教育の問題であけくれた点は他の同じような講習会に参加しても決してえられなかったものでありました。これは ELEC が大きな声をだして自慢できることではないかと心から思っています。

来年またぜひ2年生コースで全員のかたがたと顔を合わせることを心より期待しています。



(東京会場)



(静岡会場)

## Trial-and-Errors

徳島県 北島中学校 斎藤 辰夫

各府県から集まった顔、顔、顔。期待と不安で胸がいっぱいになる。いよいよテストである。sound distinction が特に難物で5、6題目くらいからはカーッと頭に来てどの発音も同じようにきこえる。

一夜明ければいよいよ hard training がはじまる。自分の目標は(1) sound (正しい発音、アクセントイントネーション、リズム)の習熟。(2) 教授法(特に1時間の procedure、指導を如何に展開するか)を身につける。併せて(3) 日常の疑問の解消である。

トレーナーの授業は大変スピーディである。ふだんの自己流のイントネーションとだいぶ違うのに苦しめられる。

Good morning. How are you? でしほられる。あんな簡単な文章がと思うのに実際に言うとうまく言えない。

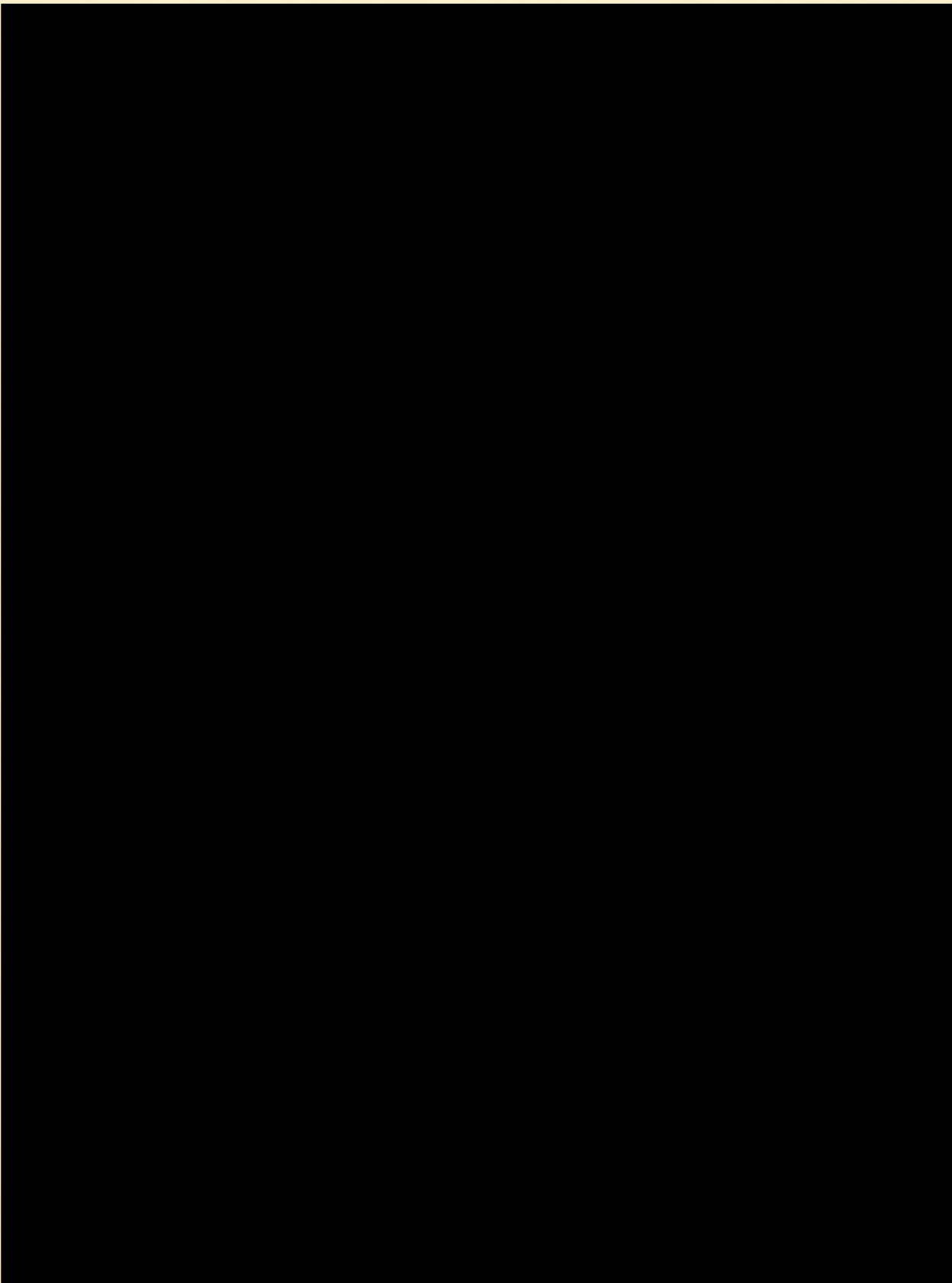
Practice teaching がはじまる。入門期の内容、

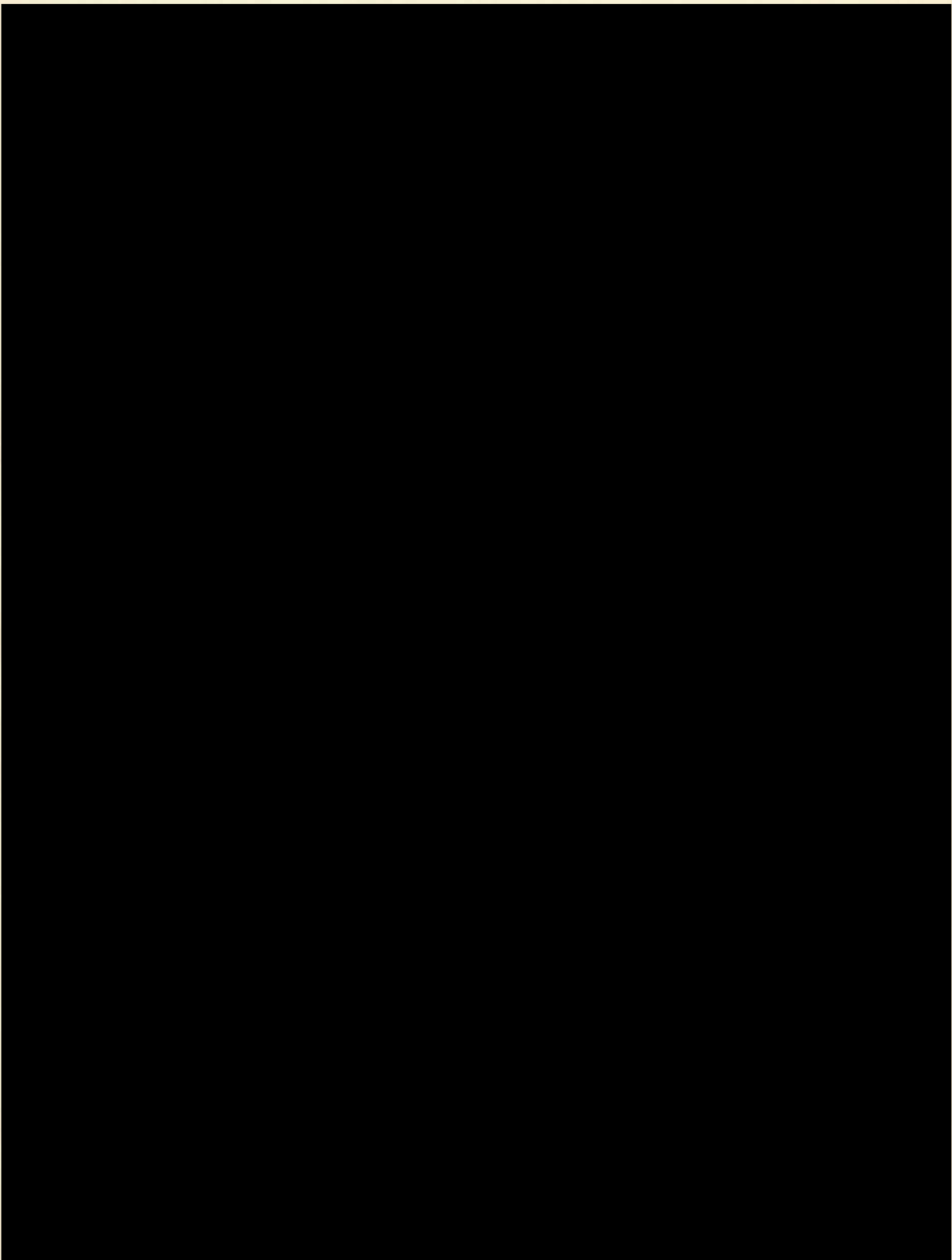
としても非常にやさしそうな所、それも優秀な生徒?を使って。それでもどうもうまく行かない。終れば額に汗がいっぱいだ。しかしそれも回を重ねるにつれておもしろくなる。

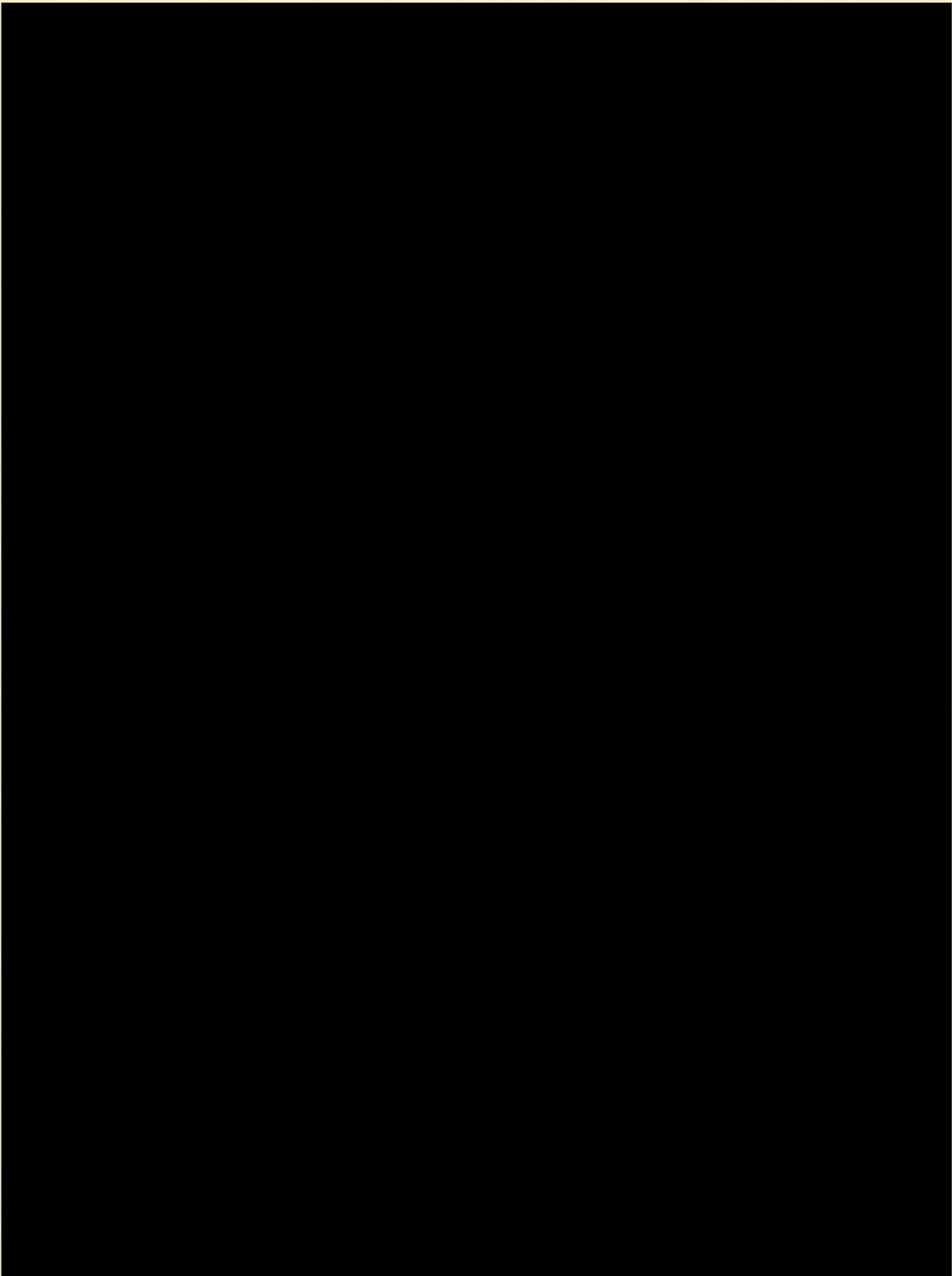
Pronunciation course もよかった。ふだん自信を持って発音している語を直されたり出来にくい発音が苦心の末に出来た喜び、ただ欲を言えばもう少し個人指導が徹底すればよいと思う。

ふだん自分の学校で扱っている時、2年の最初は Oral work が比較的やりやすいが、後半3年になると1時間の授業の流れに問題点が出て来て、それが悩みの種であったが、この講習会に来て、「oral work はこう進める」と言う teachers guide などを見るにつれて何か一筋明かるい光明が見えてきたかの感じがする。しかし、実際現場に帰って実践して見た場合には、更に幾多の障害があらわれるであろう。Oral introduction をどのように展開するか、writing をどう取り扱うか等々。

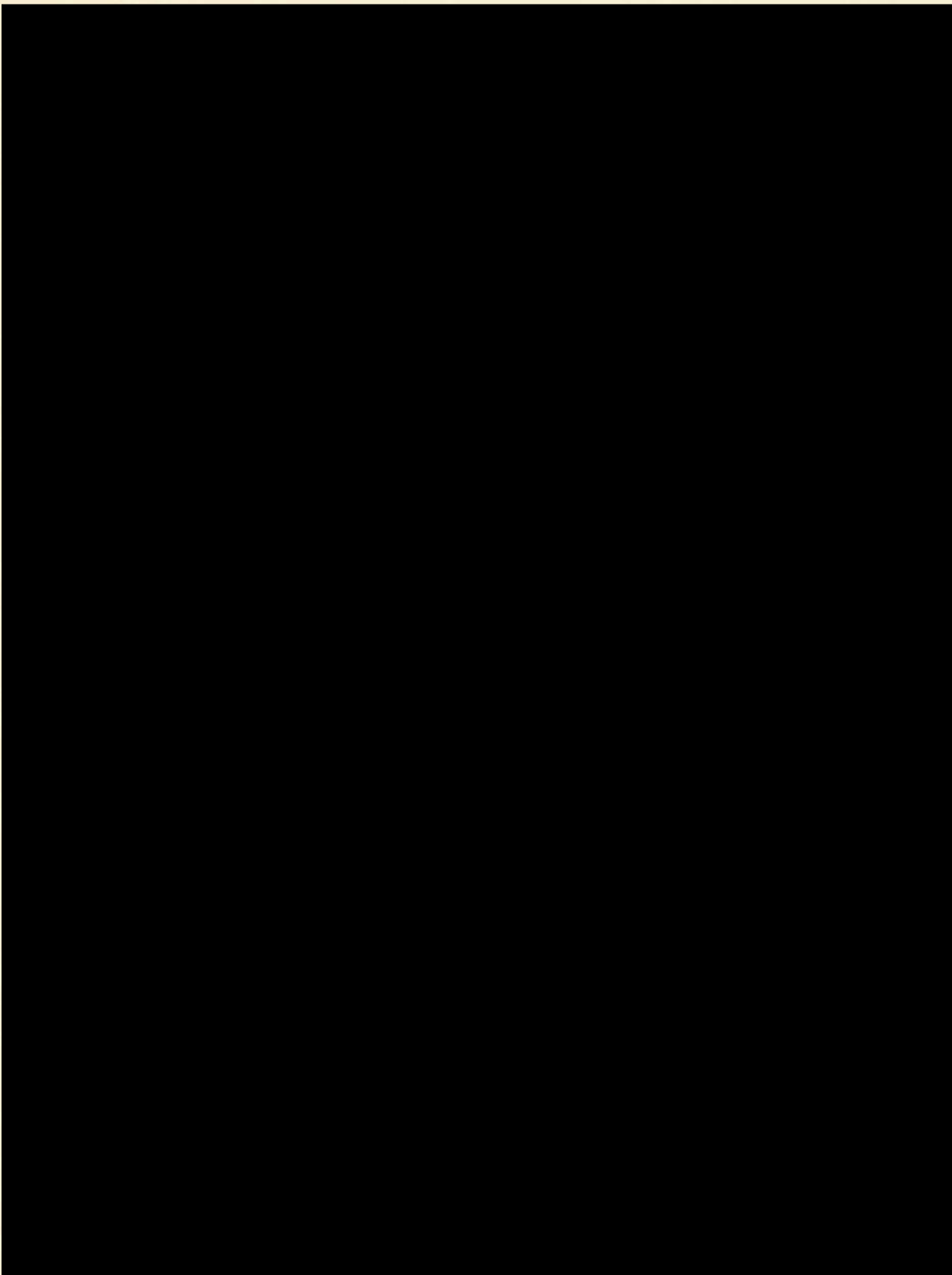
先ずやってみること。これがたいせつなのではなからうか。いろんな意味で刺激的であったと思う。

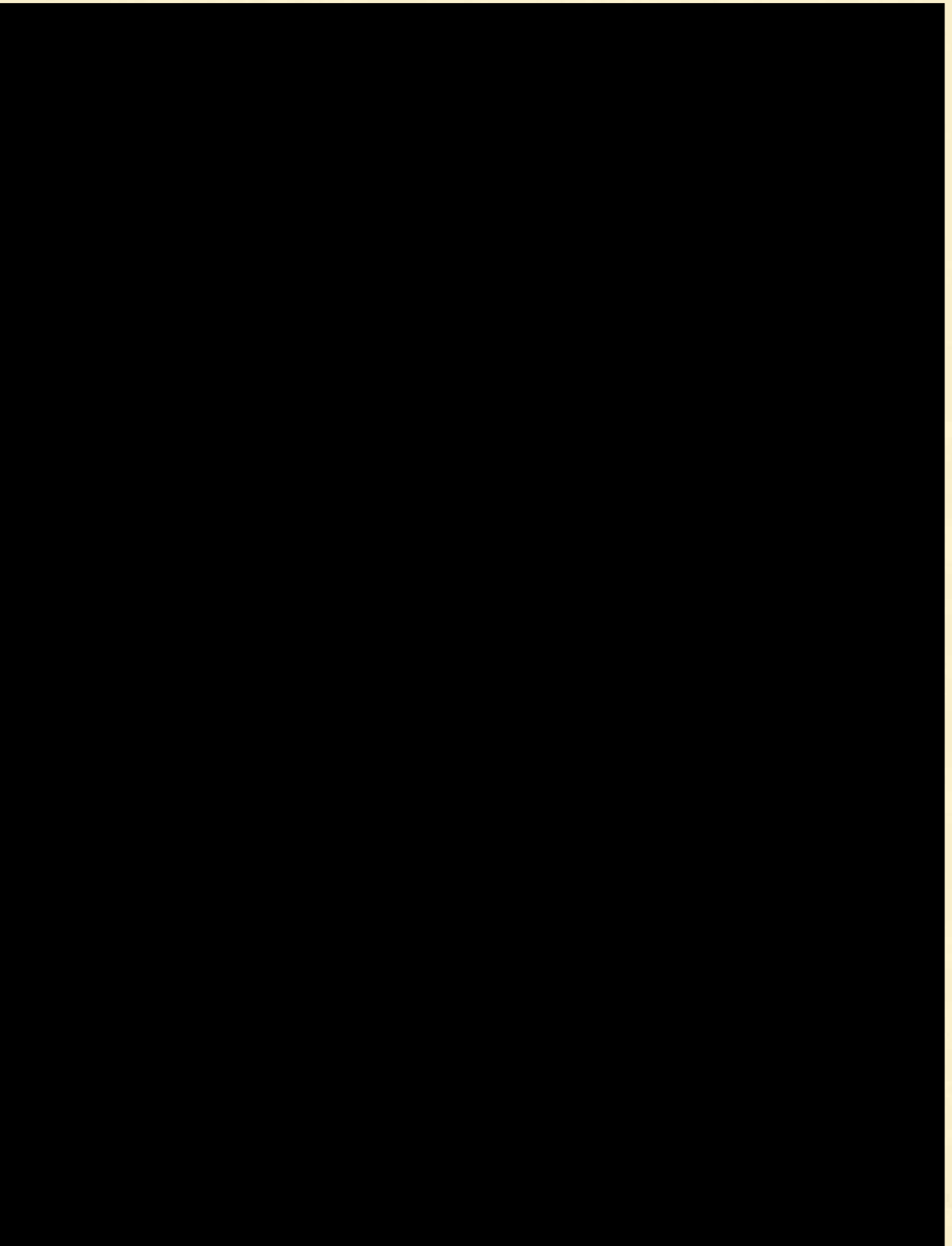


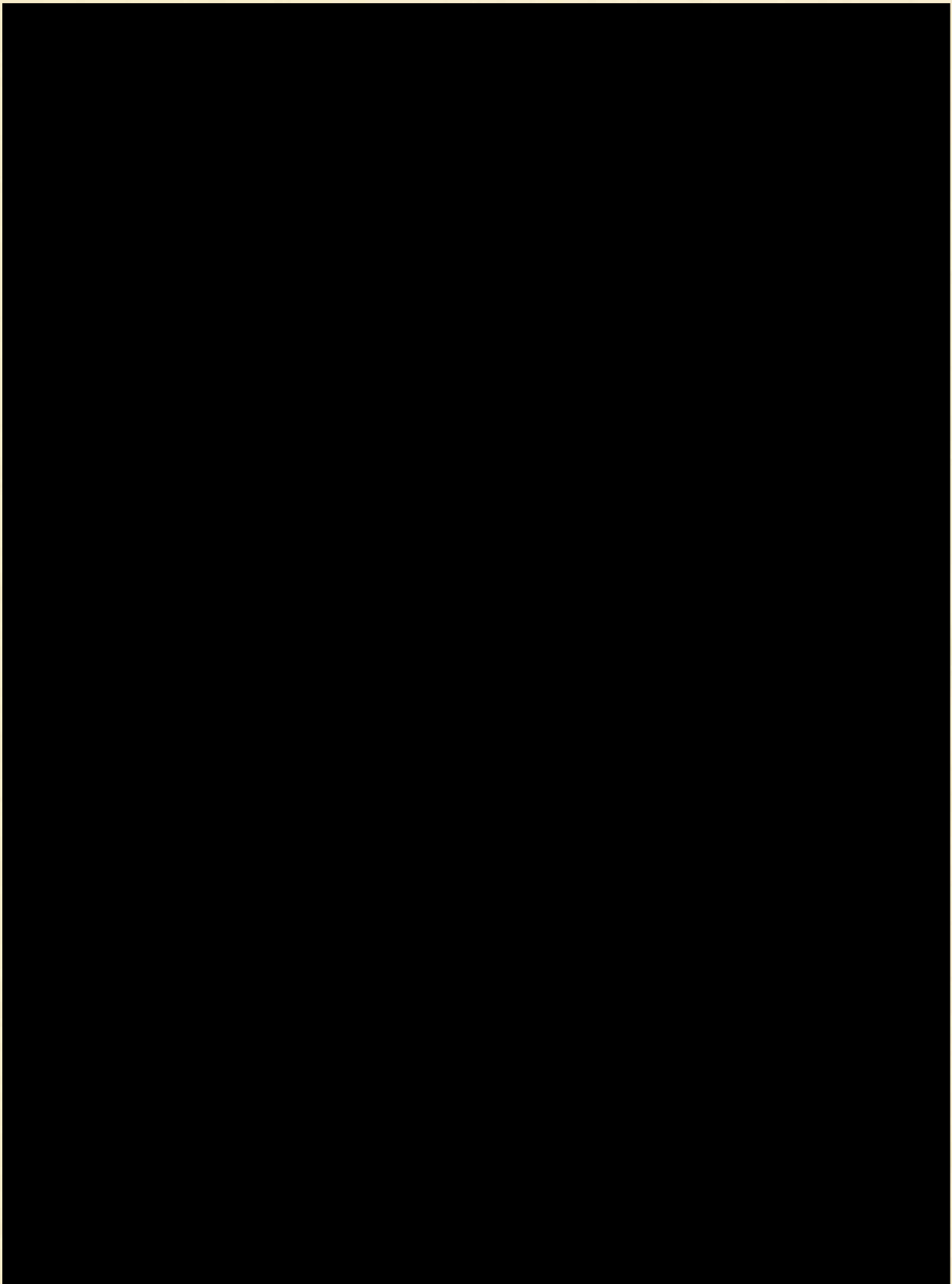












(32頁より)

今までになかったと思います。ですから、ELEC はどうもわからなかった。遊んでいる時間が多かったというよりも、非常につまらなかったが、得るところがあったという方が大勢いると思う。私の最後の希望は、3年コースというのを設けて、卒業生を救う方法を1つ考えていただきたいということです。

新井田 今ありました laboratory の利用ですけれども、非常に熱心に参加して、特に 1st Course の人などは毎日大勢の人が来られまして、テープが不足するという状態だったのです。それからまた、毎日来ているのですけれども、機械の操作についてかなり知らない人がいるわけですからやはり視聴覚ということも考え合わせてやっていくということも大事なことですし、それから pronunciation course と laboratory work 同じような時間に持たれているわけですが、やはりダブらないようにして、発音上の問題点があれば今度は Pronunciation Course に行って、そこで徹底的にやってもらいたい。

橋本 それから、もっと ELEC が高姿勢になって、こういう本を読んで下さい、ということはいいと思う。それは ELEC のためにこういう本を読んでこいというのはなく、われわれの生徒の教育のために。それから吉成さんのいわれた、地方に local seminar を作って、というお話、そういうことも大事だと思うけれども、ELEC の意図が結局どういうところにあるかということを考えると、組織なりやり方なりを十分注意してもらわないといかんの

ではないかと思います。

小林 私これで ELEC 講習会は 4 回目なのですが、現場との関係という面でここのセミナーは 1 歩前進したと思います。それは Practice Teaching の教材というものが、われわれの使っているものと違うといえば違うけれども、実際使える教科書を使ってやったのですから私自身も suggestion を得て、これならできるという確信というか、そういうものを得ました。そういう点で今年の seminar は大成功だったと思います。

清水 大変長時間でございましたが、皆さん frank にいろいろな面から、甲論乙駁の点もありましたし、気のつかない点を指摘していただいて、皆さんのご協力ありがとうございました。こういうことは 1 人相撲ではとてもいきませんで、皆さんのいろいろなご協力で初めて盛りたてられ、また成功するのでありますから、どうぞ今後も建設的なご指導をいただきたいと思います。ELEC Bulletin ができましたので、おそらく今後何らかの形でいろいろ現場でのご経験をご報告いただいて、実際に Oral Approach は現職の方々はどういう点でお困りになるか、また、どうすれば実行できるかということももっと具体的な考え方ができてくるのではないかと思いますので、どうぞご依頼する場合には、ご負担でしょうけれども、ふるって筆をとっていただきたいと思います。

司会 どうも長時間ありがとうございました。

# 講習会を終えて

司会 2週間にわたる講習会が終わりました。大へんな強行軍で、さぞお疲れのことでしょう。きょうは、ELEC講習会をさらによいものにするために、いろいろご批判いただきたいと思いましてお集り願ったわけです。どうぞよろしく。それではさっそく、いい点、悪い点を思いつくままに始めていただきましょう。

田村 Don't be shy. びくびくしないで英語を使うべきだということは百も承知のことだったけれども、そこまでようやくこぎつけることができました。American trainers との接触を多くもてたこと、これは私たち 1st Course の者にとっては非常によかったと思います。

橋本 私の印象は逆なのです。Oral Approach の理論や技術などを身につけると同時に、自分の英語を brush up するためにやはり外国人と接触することが必要なのですが、そういう機会がむしろ少なかったのではないか、食事の時間などに話すこともできるわけでしょうが、外国人とほんとうに free talking できるような時間を設けていただければもっとよかったのではないか。

鳥山 ふだんの時間割はつまっていましたから、そういう面では今おっしゃった通りだと思いますけれども、去年と比べてみますと、ことしは女子寮の中にアメリカ人の先生方が泊っていらっしゃいまして、非常に気やすく、親しくして下さって、いろいろお話するチャンスがありました。

山田 去年はお泊りになった方が2人だったのです。ことしは4人でした。

清水 (橋本氏に向って) あなたのおっしゃるのは、クラス以外の接触が少なかったということですか。

橋本 1st and 2nd Hour Classes の時には授業のことだけになってしまうのです。休み時間につかまえて話すのですけれども、何か悪い気がしまして、それ以外に free talking ができなかったということです。

清水 食時の時などのほかには機会がなかったわけでしょうか。

橋本 そうですね。Daily schedule の中にはそういう時間はとくに設けられてはいません。

吉成 橋本さんの言うこともわかりますけれど、ホームルームの trainer だけでも一応の接触は非常に緊密にいましたし、食事のときばかりでなしに、ほかの場所に出ていけましたよ。私は仙台のセミナー(東北六県英語講習会)に参加したことがあります。そこではそういうホームルーム制度がなかった。そして Personal Interview (個人面接)という free talking の時間で10分ないし15分割当てられたのですが皆なものおじしちゃうって、テーマを与えられても話し切れない。時間をもてあましてしまう。

## 1961年度 ELEC 夏期講習会日課一覧

### 午 前

1. 1st Hour Class } (ELEC 編 A SHORT COURSE IN ORAL INGLISH による授業)
2. 2nd Hour Class }
3. Lecture on Teaching Techniques  
(指導技術講義・第1コースのみ)
4. Practice-teaching & Criticism  
(授業実習および批評)

### 午 後

5. Lecture on Phonemics  
(音素論講義・第1コースのみ)
6. Lecture on Grammar  
(文法講義・第2コースのみ)
7. Practice-practice-teaching (授業実習予習)
8. Pronunciation Course or Audio Laboratory Work
9. Teachers' Forum or Recreation  
(現場における諸問題の討議・全体会議  
では質疑応答・Recreation と隔日)
10. Evening Program

1対1で10分とか15分とかきめられている、その時間だけしゃべり続けるということが非常にむずかしいという人が、1st Course の人には特に多いと思う。だからそういう時間を特別に組むというのは、どうでしょうか。

村谷 セミナーでは2つの目的があったと思います。1つは Oral Approach の理論の理解とその習熟ということで、すこれは大変よかったのですけれども、もう1つ、今問題になっている通り、自分の口頭英語の運用能力の向上ということについてはちょっと疑問があります。Free conversation の時間というものを設けて、それが1対1だと話がなくなってしまうことがありますから、5人とか10人くらいで conversation できる時間を設けたらどうでしょうか。それから、conversation だけでなくして、中学校の英語でも、非常に文法的に困ってしまうような問題も出てくるわけなのです。私たち長い間英語を教えておりますと、その言葉の nuance や何か、忘れてしまったりするのですけれども、そういう点をもう少し教えてもらったらよかったのではないかと思います。

司会 English Usage Forum みたいなものですね。

片岡 去年京都の ELEC Seminar では Personal Interview がありましたが、trainer によっては夕方外へ出て飲みながらということで、話し合ったのです。今で

たという感じがするのです。

清水 皆さんの印象はやはりそうですか。も去年の Personal Interview はよかったと思っており。そういう形式で自由に話し合うようにし、それによって自分のもっているものを trainer にみつけていただく、そうすればここに一種のつながりが出てきます。

長谷部 しかし trainer の人たちと話しているときにはかなりでたらめな英語をしゃべっても何とかやっていくでしょう。こういう点がまずいということは、なかなかこういう時にはわからないものです。自分の英語をほんとうに brush up する機会というのは、そういった free な時間ではなくて、やはり lesson を受けているときではないでしょうか。

西山 今のことで、このプログラムの中に Class Meeting の時間がもう少し入っていれば、そういうことはだいぶ cover されたのではないかと思います。普通の時間にならずに brush up されたものを生かす場所がちょっと少なかった。

中村 やはり英語を学ぶには situation が非常に大事で、教室の中だと trainer が教材に基づいてやることになってしまふ。ところが Tea-time で、コーヒーを飲みながらやるといろいろな話が出る。猫の子が生まれたというのはどういうふうにいったらいいかということが出てくる。あるいはたばこののみ方というようなことから、アクセントは cigarette であるということがわかるわけで、やはり Personal Interview で4,5人集まって、しかも自由に話ができるような時間がほしい、うちのクラスでは Practice-practice-teaching (授業実習予習) はディフェンドルファ記念館の lounge でコーヒーを飲みながらやったのですが、大変よかった。

南 さっき長谷部さんが、自分の英語を brush up するということと言われたように、正規のいわゆる lesson 午

前2時間ありましたね。ああいう時間にもかなりできるのではないかと思います。2nd Course の場合 Practice-teaching が3回ありましたが、あれを1回削ってしまってそのかわり homeroom trainer から指導を受ける時間をもう1時間ふやしていただけないか。要望ですけど。

橋本 南さんの逆の立場ですが、やはりぼくたちは実践家ではないかと思うのです。その意味でぼくたちは授業をやることによってほんとうにぼくたちの力が伸びていくのではないのでしょうか。私たち 1st Course では授業実習は2回だけだったけれども、もっとやってもらいたい。指導案の作り方なり Oral Introduction のための situation の作り方、立て方というのは、自分でやってみてはじめて自分のものになってきます。

菅原 いわゆる free talking 時間を作るというご意見に賛成ですが、私のような非常に引っ込み思案のものからいうと、何とかしゃべるチャンスをもつような時間を schedule の中に組んであげたいと思う。Free talking も必要ですけども Paactice-teaching の criticism の時間、あるいは discussion の時間、そういう中に少しでもしゃべるための時間をとっていただければ……。

村谷 くりかえしになりますが、1時間目と2時間目の時間というのは、あまり自分の英語を brush up したように思えないのです。生徒にこういうふうにするのだとみならせるといふ面では役に立ったと思いますけれども。

橋本 私のはまた逆で、指導技術や何かについては American trainers からそう学ぶものはなかった。発音の矯正とか intonation そういふ面では矯正されただろうけれども、でも、自分でもどうもおかしいなと思っても、good とか何とかで済んじゃう。徹底して、悪いところはどこまでも直さなければならぬと思う。

酒井 私も、去年に比べて発音のこまかい点について徹底的に直されることでは少しお手やわらかだった。

## 出席者

### 第1コース受講生

橋本 肇	岐阜市立長良中学校	(岐阜)
村谷 雅子	柏市立柏中学校	(千葉)
大森 玲子	文京区立第九中学校	(東京)
田村 善之	群馬大学学芸学部附属中学校(群馬)	
植田美智子	大田区立貝塚中学校	(東京)
吉成 尚武	郡山市立第四中学校	(福島)

### 第2コース受講生

長谷部和雄	更埴市立埴生中学校	(長野)
片岡志保子	練馬区立北町中学校	(東京)
南 昭哉	宇治市立西宇治中学校	(京都)
中村 成	豊島区立道和中学校	(東京)

### 講習会助手

本田 武久	川口市立幸並中学校	(埼玉)
-------	-----------	------

小林 史朗	長野市立北部中学校	(長野)
新井田一憲	小樽市立松ヶ枝中学校	(北海道)
西山 勝雄	秋田市立秋田東中学校	(秋田)
野口 政幸	田無町立田無中学校	(東京)
酒井 常子	渋谷区立本町中学校	(東京)
菅原 昌美	紫波町立紫波第一中学校	(岩手)
鳥山 堯子	立教女学院中学校	(東京)
山田喜美子	杉並区立神明中学校	(東京)

### ELEC

清水 護	1961年度 ELEC 夏期講習会 副会長 国際キリスト教大学教授
若林 俊輔 (司会)	1961年度 ELEC 夏期講習会 主事

小林 Trainer によりますね。全般的にいうとそういう傾向があるかもしれませんが。

吉成 特に後半はそういう感じを受けた。後半の方が少し手ぬるいというか、甘かったような気がします。

橋本 1時間目と2時間目では pronunciation の細かいところまでは徹底しないから、そのために Pronunciation Course を設けて、個人的に矯正してもらう、ということが計画の中にあった。その Pronunciation Course の時間がどちらかというと質問に応じて答えるということだったから……。

西山 質問に応じて、というのはいいと思いますね。

大森 私、Pronunciation Course に一番最初に出ました。大勢来てましたが、そこに先生が1人なのです。その大勢の人が皆問題をもっていたとしても直し切れないと思うのです。皆、それではつまらないということで Laboratory に行ったわけです。そして人が少なくなったところへ先生が1人というので効果的だったということなので、Pronunciation Course に大勢の trainers を動員してそこへ自分の問題をもっていけるようにしていただいたらよかったと思います。

西山 1時間目と2時間目の時間のときに徹底的に直さなくてもいいから、もう少し、あなたはこの点が弱いということを1人1人指摘してもらえば、その人は、自分はこの問題をもっているというふうに意識して Pronunciation Course に行けたと思う。

樋田 私、今まで、生きた英語を話さなければいけないということを聞いたり、そうだと思ったりしていたのですが、実際にはなかなかそういう英語を聞いたり勉強したりするチャンスがなかったので、1,2時間目の Presentation における英語の intonation とか Pronunciation の rule というのは、私にとっては有意義でした。

鳥山 さっきだけれが、自分の problem をもって Pronunciation Course に行けばということをおっしゃいましたね。それも1つの方法ですけども、その日の教材の中の pronunciation drill に出て来る練習問題がありますね。そういうものをもって行って、きょうはこれとこれをとくに強調して矯正する。そのほかに時間が余ったら時間を設けて各々やる。そして4,5日たったらきょうはゼネラルに、今まで問題があったら、きょうは直してやるというふうに組んでもいいと思う。

大森 最初のうちはとっても新鮮でした。たとえば昨日の Farewell Party でもずいぶん出ましたが、How are you! と How are you! つまらないことだけれども、それがとても印象に残っている。というのは、われわれのもっている intonation に対する粗雑な考え方がそこら辺でうんとたたかれた、というのが非常に新鮮さがあつた。

菅原 2時間という期間で、1st Hour Class と 2nd Hour Class をどのように運用するかということについて、前半をやはり Oral Presentation というものに力を置いて、後半は Variation & Selection Exercises,

Pupil-pupil Dialogs こういうものに重点をおいてやらうかどうか。

片岡 去年の話ですと、1週間習ったことについて、テープレコーダーに入れて土曜日に皆さんで聞いたということです。そうやって weak points を教えた。そしてエレクトリックが出て来るほど寮で勉強したそうです。ことしは Practice-teaching の方で頭に来て、おさらいすることができなかった。Practice-teaching も大事ですけども、1時間目、2時間目をしっかりするためには、そういうテープレコーダーを使って、weak points のわかるようにしてほしかったと思います。

菅原 今の話よくわかりますが、地方から来た人の話を聞きますと、ELEC における目的は、何か指導法の新しいものというか、(自分の英語を brush up するのが目標の人がいるでしょうが)指導技術の面で、何とかすぐに応用できることを勉強したいと思うのだけれども、はて、13日終ってみてどういうことになったかということ、帰ってから使うには、intonation は覚えた。発音も少しは矯正された。ところが授業ではということ……。

鳥山 それについてですけども、去年に比べて Practice-teaching の目的がはっきりしていたし、教材も示されて、これを使って下さいということでした。そういうことではっきりしていたということはとてもよかったし、皆さん実際そういうふうになさってこそ自分のものになったと思います。たとえば私たち assistant としてお手伝いをしておりますと、1回目は Teachers' Guide をそのままつかいますからあのままでよいのですが、2回目の Oral Introduction の練習なんかはずいぶん直して、suggest, advice する例が多くて、やはりこのままにしておかなくてよかったという気がします。

中村 要するに Oral Approach は、いろいろ雑誌その他で読んでわかっているようですが、現場への具体的な応用については実際わからない。だから Teachers' Forum の General Meeting でわかって救われた人がたくさんあったのではないか。だから1時間くらい Oral Approach の概念を、日本人の先生でもけっこうですから具体的に説明したあと、あるいは英語でプリントを配って下さってもいいから、あとに demonstration で……。

野口 ことしは、demonstration を最初にやりましたね。Practice-teaching の1回目の終わったところでもう1回やって確認すると、もっとはっきり2回目なり3回目なりができたのではないかと思います。

酒井 私たちのクラスでは9人しかいなかったのですが、10人目に私がやりました。Oral Introduction を具体的に段階に分けて実演したわけです。そして homeroom trainer が適当に解説を加えたのです。2回目の Practice teaching は、割合整然として授業をしたというふうに思っています。

村谷 それに関連して、——具体的に、こういう場合にはこういうふうにするのだということも大事だと思うので

すけれども、現場にいるいろいろな障害にぶつかって、またもとにかえってしまうということもありますから、やはり私たちはもっと、Oral Approach というものはどういうものかということの原理的に、理論的に頭の中に入れるということも非常に大事ではないでしょうか。Teachers' Forum の General Meeting をやってからわかったのですけれども、もう少し、Palmer はどういうことをいっている、Fries はどういうことをいっている。日本ではだれがどういうことをいっている。というふうに具体的に出示していただいたほうが、私たち勉強の助けにもなりますし、実際にやっていくときの支えにもなるので、そうした講義がほしかった。

**長谷部** Demonstration のことですが、ぼくが去年京都セミナーへ行ったとき、3回ありましたが、やはり実際に見たものが印象的な気がします。たしかにプリントでもらったものも役に立つけれども、やはり実際に教壇に立ってやるという場合には、自分の目で見たものが、これはああいうふうにやるのだな、とヒントになるような気がします。

**橋本** 私の部屋の人も言っていたのですが、本で techniques や何かを読んだけれども、実際にどうやるかということがわからなかったが、ELEC にきてそれがわかったということです。ただ心配することは、techniques を覚えていって、それを鵜呑みにして模倣してしまう危険性があるのではないか。それ以前に、Oral Approach の原理を、(自分の勉強だろうと思うけれども)理解し身につけるのが必要ではないか。聞いただけで Oral Approach をこなしたと思ってしまう危険性があるということです。

**長谷部** それに関連して、もう少し周到な Oral Approach についての理論的なものを理解させるための準備が欲しいという感じがしました。

**大森** そういう意味では牧野先生の時間はたいへん貴重だったと思います。私にとっては大へんなショックで、今まで私のもっていた英語に対する考え方というのがくつがえされたということ……私の受け取り方では音楽論というのは Oral Approach を理解する上に大事なのだということがわかった。ああいうことがわかってないと Oral Approach というのはわからないということがわかりました。ああいう時間をもっと設けてほしい。

**司会** 時間もだいぶ遅くなったので、そろそろ総括に入りたいと思います。大体今まで話し合われたことで全プログラムについて意見がかわされたと思いますので。

**酒井** ちょっとえらそうなことをいいすぎるような気もするのですけれども、何か、あまりあれもやってもらいたい、これもやってもらいたい、期待しすぎているように思うのです。ELEC でもう少し高姿勢に出て、前もって pamphlet を配って、これとこれは自分で勉強してきてもらいたい、くらいのことはいいと思います。くる人は、これもわからないあれもわからないと、当然自分で知っていなければならないと思うことまで ELEC におぶ

さっている。という感じもするのです。

**田村** それの証拠固めになりますけれども、私もここへ来るということがきまってから、何かはしていかなければならないという気持はあったのですけれども、何をしていたかわからない、それだけで終わってしまったわけです。ですからそういうことは是非やってもらいたいですね。

**吉成** ELEC はどういうお考えか知りませんが、local seminar とでもいうもので一応の概念というものをやって、勉強をして、そこで central seminar に出れば相当程度の高いものができると思います。

**菅原** 今の酒井さんの意見を敷衍することになります。が、script (講習会用教材)の内容については非常に研究なさって本の形にもなりましたしけっこうだと思います。でも講習会全般の2週間の中に、単に script だけの勉強ではなく、recreation でも勉強でしょう、songs の時間でも勉強でしょう、laboratory work でも勉強でしょう。たとえば recreation についても英語の歌とか英語のゲームとかで、ただ遊んでしまうというのではなく、recreation をやりながらも、何か英語に関するものを学んでいく、というふうな準備が必要ではないかと思ひます。

**山田** Assistants の役割割りなんかそこから出て来るのではないかと思います。もう少し前もって、こういうことにアシストしてほしいから注意してくれとか、これだけのことは読んできてほしいということがあればもう少しお役に立ったと思います。2年つづけて assistant をやりましても、どういう役割をしたらいいかということがよくわかりかける程度で、ちょっと不安で申しわけない感じがします。

**田村** 13日間が終わったあとの感想ですが、はじめ、Practice Teaching のときに、いいかげんにやって、Translation Method の方がよほどいい、というふうにいって人がいるけれども、それでも、私はやってみようという人が出て来たわけです。そういう点では非常に成果があったし、私自身ほんとうによかったと思います。

**本田** 私は2年担当の助手ですから2年関係のことを、私自信 ELEC の講習に非常に恩恵を感じております。いろいろ問題にできる点はあったと思いますが、大へん得るところがあったと思います。とくに1時間、2時間の授業では相当スピードの高い話しを聞くというのは力がついたと思います。それから Practice-teaching 構成がはっきりしたということが非常によかった。こういう方針でやってもらいたいということを割り切ってやりましたからやりやすかった。今までにないことです。それから午後の laboratory の利用というのは。場所のせいでしょうが、午前中の授業の後習にもなりました。これは東京セミナーの第一の特徴だと思います。それから Teachers' Forum は、回り道になったという点もあると思うけれども、とくに最後の General Meeting がよかったという話でしたね。ことしほどびっちりプログラムが組んであったのは

(28頁へ続く)

## THE LIFE AND TIMES OF THE FRESHWATER TROUT

Fred S. Thompson

When we planned to come to Japan for study, my wife and I decided to go through Europe and Asia in a leisurely way in order to see and feel the transitions from the Christian world to the Mohammedan, from the Mohammedan to the Hindu, to the Buddhist world.

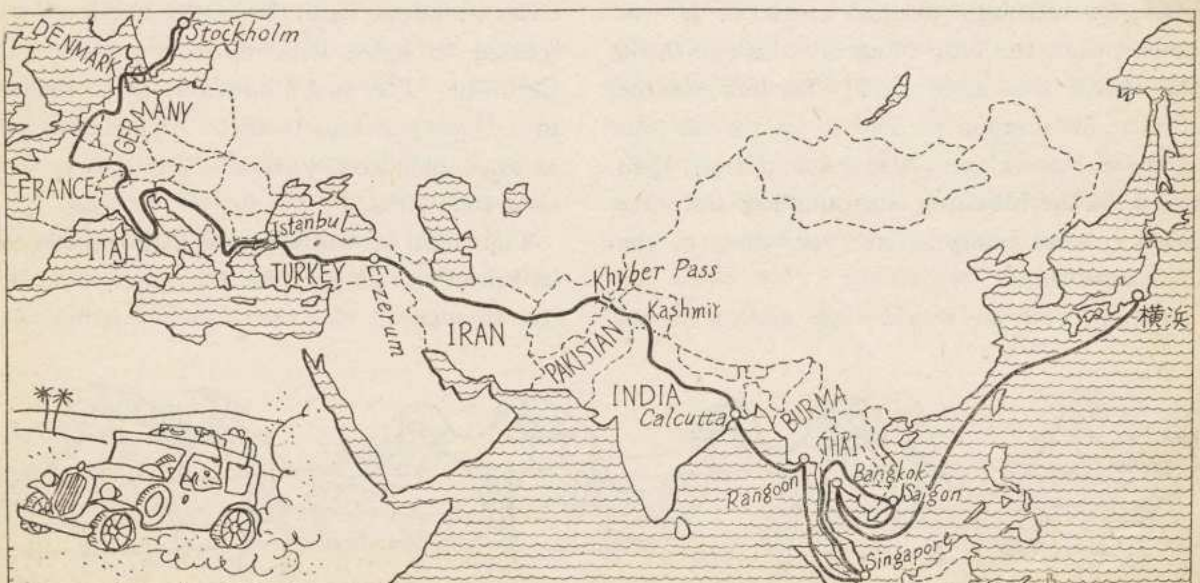
We started by car from Stockholm, Sweden and travelled through Denmark, Germany, Holland, Belgium, France, Liechtenstein, Switzerland, Italy, Jugoslavia, and Greece before reaching Istanbul, Turkey.

Istanbul, the city where Europe and Asia meet is the gateway to the Mohammedan world. Here we camped in the European sector of the city and subsisted on a diet of freshly baked bread so hot that the flies were not yet able to settle on it and watermelon to provide uncontaminated liquid. Here we met our most discouraging defeat. The car was broken into

and all our clothing stolen. This naturally caused uncertainty and fears of what might lie ahead. We frantically searched for our clothes in the bazaars and shops, but even with the help of the police we were not able to recover any of our belongings.

However, we made the decision to continue driving east on the famed silk road to the Orient. Resolutely we crossed the Hellespont into the Asian sector of the city. The ferry trip from Europe to Asia cost fifty yen!

The first problem was heat. From Istanbul onwards to the Khyber Pass we were to gain altitude. The desert plateaux of Turkey and Iran were dry and hot, magnifying the importance of an adequate supply of water. There were several occasions when there was only enough water for drinking and since "cleanliness is next to Godliness", we were com-



pel led to use every available source of water for bathing as well as for replenishing our drinking supply.

In Erzerum, the Turkish military zone bordering on Russian Armenia, we found a wide shallow muddy river for bathing. We gratefully lay in the shallow silty water and got cooled off rather than cleaned off and for the first time on the dusty, bumpy roads of Turkey's plateaux, felt relaxed and refreshed . . . that was, until we slowly came to realize that we were sharing a community "ofuro." About two hundred metres upstream, some water buffalo were also gratefully cooling off and cleaning off! But water is WATER, so we filtered the brown liquid into our drinking bottles and added an extra super dose of chlorine and resumed our journey on the old silk road.

The historical route was so badly in need of repair that at times it was much smoother, albeit dustier, driving on the desert. Apparently the little traffic that this road saw had also come to the same conclusion and thus the road became smaller until it finally disappeared, leaving us with a compass, a map and the stars to guide us from village to village.

At times the sand dunes presented a problem, for although we had a winch, it was useless, since the only thing on which to hook the winch was more sand! To increase the surface for traction we had to let the air out of the tires, continue across the sand dune, then stand in the blistering sun pumping the tires with a hand pump before proceeding to the next sand dune.

Occasionally we would come upon a camel

caravan being led by a donkey. A rope from the donkey's saddle was tied to the nose of the camel following, likewise a rope from the camel's tail to the nose of the next camel and so on. If one of the animals in the file faltered or strayed, the result would be a painful jerk on the ropes attached to the tails and the noses of all the other members of the caravan.

At the border of Afghanistan there was a great deal of excitement since foreign travelers from Persia are quite rare and two blonde human beings would quite obviously be a museum piece. The border official was some time in appearing but when he finally came running out of his clay hut we understood the reason for the delay. He had needed the time to clothe himself in every possible article which would make him appear a major official, including a winter overcoat, boots and gloves, in spite of the thirty-five degree temperature of the Afghan desert.

With the possible exception of the small Himalayan kingdom of Nepal, Afghanistan was undoubtedly the most primitive country through which we passed on our 30,000 kilometre journey to the east.

My wife had had some hair raising experiences in Turkey with the local inhabitants who seemed to agree with me that my wife was beautiful. The turks, however, were inclined to be too generous in their appreciation and at times bloodthirsty in their attempts to show their manliness.

Thus with all the stories of Afghanistan and its primitive folk my wife was more apprehensive than ever. Her nervousness was not with-



out justification, for after our first day's travel in Afghanistan, we had come to a bridgeless river in the late afternoon, managed to find a fairly shallow spot to get the car across and eventually we set up camp beside the stream. While we were sitting in our tent cooking powdered soup in muddy chlorinated water, we became aware of eyes staring at us through the tent opening. We hadn't encountered any forms of civilization since the Afghan border and all of a sudden out of nowhere appeared two men on horseback with bandoliers full of bullets crisscrossed over their chests and rifles over their shoulders. The riders stared with expressionless faces at the unaccustomed sight, turned and rode off without a word.

This set the stage for all the terrifying possibilities which might follow and yet to drive on in the dark over the trackless desert would be worse, so we were compelled to sit and wait. As night came, darkness was our only company and we lay down to try to rest.

Then there were noises. I got up like a shot and out of the tent. Down at the river was a band of riders armed like our previous visitors with rifles and bandoliers. I walked up to them trying to conceal all forms of nervousness. They remained on their horses and their shaggy faces stared at me from under their white turbans without uttering a sound and after ten full minutes, of which I was aware of each second, they turned their horses, forded the river and melted into the darkness.

No harm came to us that night other than that by morning, we were worn out from the lack of sleep and nervous strain brought on by

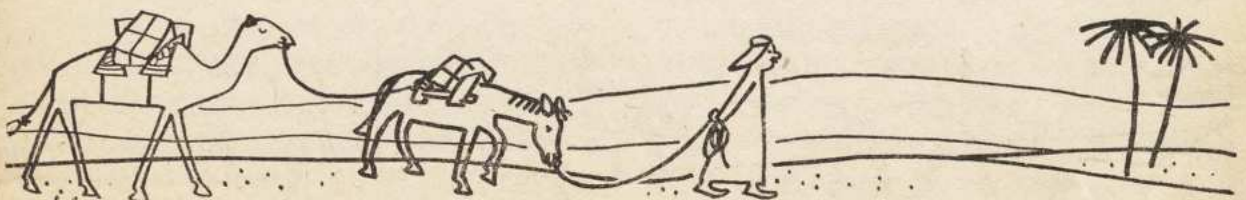
forced vigilance and vivid imaginations.

That day we decided that the best way to allay our fears would be to meet some of these people in broad daylight. So when we came upon a cluster of burlap shelters stretched on poles we stopped our car. We were immediately surrounded, as people poured from the tents to look at this novel sight. I boldly left my tired wife in the car to guard our few possessions and walked over to the tents. After exchanging some primitive greetings we were invited in for tea, so I went back to the car and escorted my wife into the tent.

These inhabitants were nomads who spend their entire life wandering about the land in search of water and fodder for their animals and themselves.

They rolled out a most beautiful, handmade wool carpet of natural hues and dyes and motioned for us to sit down on it. Then the chieftain of the group placed himself opposite us on a large cushion. We "conversed" by drawing pictures on the dirt floor. Eventually a veiled woman came into the tent bearing two pots of tea and a bowl of brown sticky lumps which we found were used for sweetening the tea. We sipped our tea surrounded by curious Afghans and at the same time tried to answer the chieftain's queries as to where we came from, how long it had taken and where we were going.

Finally the water pipe was brought in and lit. The chieftain tried it then handed it to me. I smoked it for a minute or so and then said to my wife, "Here's your chance to try a water pipe!". As soon as I passed it to her



there was great consternation and by means of yanking at their beards and pointing to my wife we understood that because she hadn't grown a beard she wasn't allowed to smoke the water pipe.

As we were about to leave, the chieftain's son insisted that he be allowed to slaughter a small lamb tied to the tent pole. We had a difficult time refusing his offer of hospitality without offending by trying to convince him that two people and a dead lamb would be uncomfortable travelling companions in the forty degree heat of the day.

Such an enjoyable encounter with the nomads set our minds at ease and we were able to appreciate the wonders of this primitive part of the world with renewed enthusiasm.

After Afghanistan we entered Pakistan and India which although more civilized in parts, appeared to be poorer and more miserable than any place we had seen. We travelled on up to Kashmir through the Banihale and although we were isolated by a landslide for some fourteen hours in the 2,500 metre pass of the Himalayan mountains we were able to reach Calcutta without any further worry of being raided.

The Burma borders were closed to traffic so we walked the docks in Calcutta and finally got a job on a Norwegian freighter which took us and the car to Singapore via Rangoon and Indonesia. From Singapore north through Malay to the Thai border the road was excellent. Once in Thailand, however, we were told that there was only a surveyed road and that we would have to put our car on a train to get it through the Thai Peninsula.

This was not only uneconomical but against the spirit of our trip, so we spent two days getting permission to use the jungle trail through the peninsula.

The trail was just a mud and water track through the jungle. At times we had to build our own bridge or try to maneuver the car over the river on two round logs spanning the stream from bank to bank. We winched and dug our way through more often than we drove. The times when we did drive we got stuck so deeply in mire that we had to climb out of the windows in order to attach the car to a tree. Consequently, we arrived in Bangkok completely immersed in mud.

We checked into a hotel in order to have a proper bath and as we were not able to leave the car parked outside, the management kindly invited us to drive our mud-caked car into the hotel lobby and there we camped in style!

We drove to Cambodia to see Angkor Watt and Phnom Penh and intended to board a ship in Saigon bound for Japan. However at the Vietnamese border we were turned back because of a coup d'etat and were forced to return to Bangkok to wait for a ship which would take us to our destination.

During our eight months of travelling we used a hotel only on two occasions so that our six tatami room here in Tokyo feels like a mansion. Why, we even have the added luxury of a bath whenever we wish . . . at the public "ofuro"! . . . a luxury that we are looking forward to enjoy for the next two or three years.

(Instructor, The ELEC Institute)

# 英語音素論入門

## 第 I 回

青山学院大学講師 牧 野 勤

外国人と英語で話し合わなければならない破目におちいる度に感じるのは、我々の英語の特に発音の不完全さである。自分の言っている事が相手になかなか通じない。相手の言う事がさっぱりわからない。我々が習って来た英語などは、外国人と話し合うというそんな大役を（ある人にとってはそんなつまらない役を）果たす事を最初から予定していないのだから役に立たなくとも本望だという見方と、言葉は相手と話し合う事を第一義としているのだから語学教育もそういう意味で改善される必要があるという考え方が対立する。

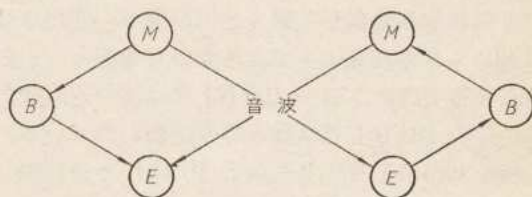
時間的な隔たりのある古典を読み、距離的隔たりをもって欧米と交際をしていれば発音の事を考えずに書かれたものだけで事足りるかも知れないが、アメリカに行くのに2週間、欧州に渡るのに1カ月といった感覚の時代は過ぎさったようである。世界の動きがすぐに日本に影響を与える時代である。話すという事はこの目まぐるしい時代の象徴でもある。

言葉の障害を克服する第1歩は何といっても発音の改善にある。戦前の学生は服装に無頓着だったが、発音に対しても言葉の服装であるかのように考えて無関心だった。内なる精神尊重は意味内容の尊重という事だったのである。しかし言葉は音声と意味とが一体となったもので、発音は言葉の服装であるよりは骨であり肉だったのである。

我々が発音の重要性を認識していない間にも、19世紀から欧米では音声に関する研究が随分熱心になされて来た。そして語学教育にもすぐこの考え方が盛んに影響を与えていったのである。

音声の研究者の最初の関心は、色々な音はどこを使ってどんな具合に出されるのだろうか、出された音はどんな性質のものであるのかという事であった。第1の研究態度は音声生理学 (Articulatory or Physiological Phonetics) と呼ばれ、第2の立場は音声学 (Acoustic Phonetics) と呼ばれる。

今2人の人が対話をしているとしよう。



左右の人はそれぞれM=Mouth (発声器官) E=Ears (聴覚器官) B=Brain (言語中枢) を持っていると考えられる。左の人は言語中枢から指令が出て発声器官を動かし音波を出すと、それが右の人の聴覚器官に訴えて言語中枢で理解され、更にそこからすかさず自分の発声器官に依って音波を出し相手の聴覚器官に達するという同じ事が繰り返されて対話が成立する。この場合発声器官の部分の研究するのが音声生理学で、音波を研究するのが音声学だという事が出来る。

今、誰かが Thank you と言ったとする。最初の音は舌の端を両歯の間に入れて発音されるとか、上の歯に舌端をつけて発音しなさいと教える事が出来るが、それは音声生理学的知識を活用したのである。Fine の最初の音をローソクの焰でも吹き消すような口の格好で（両方の唇をせばめて）発音している生徒に、上の歯を下の唇にあてて発音しなければ駄目だと注意するのも、何処でどう発音するかを知っているから効果的に注意が出来るのである。

又 pool の母音が具合が悪くて相手に通じなかった場合、唇をもっと丸めて緊張させて突き出させたり、bought の母音を boat の母音よりは唇を丸めた状態で思い切り口をあげさせたりするのも何処をどうして発音するかの知識を活用しているのである。音声生理学的知識を十二分に活用するためにはどうしても発声器官にどんなものがあり、どういように使われるかという事を常識にしておく事が必

要である。それは [b] とは「有声両唇閉鎖音」という公称のようなものである必要はない。[b] は両方の唇を使う点では [p] [m] 等と同じ音だが [p] と違って声帯が振動しているし [m] と違って鼻に声がぬけない。鼻にぬける音は [b] や [p] と違っていつまでも続けられる性質を持っている。

子音について考える時には少なくとも (1) 有声か無声か, (2) どこで発音するか, (3) どんなふうに発音するかを考えて見る事。母音の場合には (1) 舌の高さ (口の開き方, [i] [e] [a] という3つの母音を鏡で口を見ながら発音して見ると口の開きの変化を簡単に認める事が出来る) (2) 舌の前の方を高めるか舌の後ろの方を高めるのか ([i] [e] 等は前の方が使われているし [u] [o] 等は後ろの方が使われている) (3) 唇が丸いかどうか (英語の [i] [u] とを比較して見るとすぐ理解出来る) を考えて見る事。

一方 thick と sick の最初の2つの音について少し検討して見よう。2つの音がはっきり違って聞こえる人はその違いをどんなふうに聞いているのだろうか。/θ/ はにぶい音に聞こえ、/s/ はするどい感じがしないだろうか。英語の摩擦音の中には /θ/ /f/ のようににぶい音と /s/ /ʃ/ のようにするどい音がある。出された音を機械で検討するのが音声学と呼ばれる領域である。しかしするどい音、にぶい音を作り出しているのは口の中の空気の通路の形や大きさによるのである。/s/ を発する時の空気の通路は非常に小さい。/θ/ の場合には細長い通路を通して空気が出て来るからするどきに大きな違いが出来て来るのである。

山に登った人達が「ヤーホー」と大きな声を出している。何故「イ」とか「ウ」とかいう音を使わないのだろうか。「イ」と「ア」、「ウ」と「オ」の違いは口のあけ方や舌の位置等で説明がつくが「ヤーホー」の本当の必然性は実は大きく口を開けて出す母音ほど遠く迄聞こえるという事に関係がある。永い音声学の歴史はこうした知識をたっぷり我々に提供してくれる。

所が音声学が進んでも残念な事に何が大切で何がそれ程大切でないかを教えてくれなかった。そこで我々が注目しなければならないのは1920年代から発達したと考えられる音素論 (Phonemics) とか音韻論 (Phonology) とか呼ばれている学問の事である。以下この学問の考え方やそれがどんなに英語教

育の上で役立つかを考えて見よう。

ある所に2人の子供がいた。子供は Paddy という名の小犬を非常に可愛がっていた。所が子供達が学校に行っている間に大変な事が起こってしまった。Paddy が車にはねとばされたのだ。母親は散散に迷ったあげく、隠し切れるものではないとあきらめて子供達が学校から帰るとすぐ Paddy の死を知らせてやった。驚いた事に子供達は悲しそうな顔もせず遊びに行く。案ずるより生むはやすしと母親がはっとしていると子供達が泣きわめきながら帰って来た。どうして教えてくれなかったのかと聞いた。「今頃になって一体どうしたの。さっき教えてあげたでしょ。」と言う母親に対する子供達の答は “We thought you said Daddy.”

父親たる事の悲劇を味わう前にこの話を音素論的に味わう事にしよう。大切なのは子供達が /p/ を /d/ と聞き間違えたという事である。又 /p/ と /d/ は聞き違えられては困る大切な音だったという事である。ある国語で、ある音が他の音と間違って言われたり理解されたりすると、誤解が生じたりさっぱり話が通じない場合がある。その場合、問題の音は他の音と絶対に区別しなければならない大切な音と考えられる。(音素 (Phoneme) というのはこうした大切な音の事をいい、// に入れて書かれる習慣が出来つつある。) /p/ と /d/ はそれぞれ別個の音素なのである。アメリカ人が良く water の /t/ を「ワーラー」のように発音している。もし少しきどって「ウォーター」のように発音した場合、「ラ」のような音と「タ」のような音は /p/ と /d/ が違う音であると同じように違う音である事には間違いのない筈である。しかし /p/ を /d/ と言い違えたり聞き違えた場合に起こる誤解はワーラーとウォーターの間に存在するだろうか。この場合「ラ」と「タ」のような音の区別は大切ではないという事である。(音素という言葉を使えば2つの音は違う2つの音素ではなく1つの音素に含まれてどちらが使われても問題にならないメンバーなのである) この区別は同じ人が嫌ネクタイをしめたか、普通のネクタイをしめているかの違い位で同じ人である事はまちがいないのである。一方 /p/ と /d/ は2人の別個の人と考える事が出来る。Betty をベリーのように発音したら berry や belly と同じにならないかと心配されるむきには3つの単語をアメリカ人に発音してもらえ

ば全部が違って聞こえて、英語には「リ」のようなどうしても区別しなければならない音が3つもあるのかと別の心配が生まれるだろう。大切な音をどうしてみつけ出すのか、その方法が実は音素論の第1歩である。ここでは一般に広く受け入れられている方法を簡単に説明して見よう。

ニューヨーク市は東京にもまして大きな町である。建物から受ける感じ、広さ、そして電話の数、そうした点では人口だけを誇る東京の比ではない。職業別、人名別と2冊の電話帳しかない東京に対してニューヨーク市では電話帳が数冊に分かれて色々な名前を記載している。ニューヨーク市は電話の数が多いだけではなく色々な人種の集まっている最大の場所でもある。ヨーロッパからの移民が自由の女神に感動しながらアメリカに上陸する場所がこのニューヨーク市だからだ。人種が多ければ名前の種類も多い。ある物好きな言語学者がこの点に注目したのはなかなかの達見と言えよう。彼は数冊の電話帳から音が1つだけ違う名前を驚くなれ15も見つけ出したのである。Bitter, Chitter, Ditter, Fitter, Gitter, Hitter, Jitter, Litter, Mitter, Pitter, Ritter, Sitter, Titter, Witter, Zitter。今仮りにLitterさんに電話をして、Ritterさんは在宅ですかと言ってしまったとしよう。Litter氏は間違っただけかと思ったかと思って電話を切ってしまうかも知れない。15の名前の最初の音は決して間違えてはならない大切な音なのである。すなわち音素が15見つかったわけである。このような場合最初の音はそれぞれ対立しているという表現を用いる。2つの音が対立していればその言葉を話す人達は100%に違いに気付く筈である。このようにして調べて見ると英語には22か24の子音が見つかる。22というのはchurch, judgeの最初と最後の音はそれぞれ/t/と/tʃ/, /d/と/dʒ/が結びついたものとする新しい音素を2つ認める必要がないし/č/ /tʃ/というような記号でその新しい音素を表わす必要がなくなって来る。/tʃ/ /dʒ/ (/tʃ/ /dʒ/とも書かれる)のような記号を使うと/ɜ/ (又は/ɝ/)との違いを説明するのは便利である。又pin, penという語では母音を間違えると具合が悪い所から/i/と/e/は同様に2つの音素だと考える。このような場合、言語学者は2つの音素が対立(Contrast)していると言う。或いは2つの音が対立しているかどうかで音素を認定する

所からそういう方法も対立の原理と名付けられる。2つの音が音素かどうかをきめる一番確かな方法がこの対立という方法である。

我々はよくまりの事も台所で使う丸い入れ物の事もボールと言っている。しかし2つは綴字を見ても違うように耳で聞いても違って聞こえる。2つのボールの母音は対立しているのだ。一方綴字が違うmeetとmeatは耳では全然違いが聞えないから対立していない事がわかる。英語の対立する母音を14認めるフリーズ(ミシガン大学の発行物は大抵この考え方の教材を使っている)や9つ認めるトレーガー・スミス(アメリカ学術会議が編纂した教材はこの考え方に基いている)や7つしか認めない人もいる。ここで大事なことは違って聞こえる音は何んらかの方法で違うものとして扱われなければならない事である。対立する音は決して同じだと考えられないし同じように表記出来ないからである。

昔から精密表記とか簡易表記とか、どの位詳しく音を書き表わしたらいいかと問題になっていたのは大体において発音関係の本や辞引にのっているのは一種の音素記号であり、大切な音の区別しか書き表わしていない。この事は非常に重要な事で発音記号の違う音は100%に違って発音され、違って聞こえては困る。しかも自分で発音する場合は自己流の区別ではなく英米人に通じる事という最小限の条件がある。この最小限の条件も実際には案外大変なのである。/l/と/r/の区別についても/r/をアメリカ人の出すように舌をそらせて出す事がむずかしければ舌の尖をふるわせる音で代用する事も出来るが、いずれにせよ100%に区別する事が大切である。

しかし辞引その他でこうした発音記号に接していると、/p/は何時何処でもpと書いてあるため、この音は何処でも同じに発音されるという誤解が生じて来る。しかしこれはまさしく誤解で、この誤解をなくしないと普通の英米人の話す英語はわからなくなってしまう。ラジオから聞こえて来る英語番組の多くは出来るだけ同じ音を同じように発音してくれる。そういうゆっくり発音された英語になれた人がFEN(駐留軍放送)を用いたり、英語ニュースを聞いたりするとそのスピードに目を回わしてしまう。しかし原因はスピードだけというよりは文章を読むのに単語の発音を使い、単語を読むのに一つ一つの音を不自然にはっきり読んでいる人達と、全てを自然に

読んでいる人達の英語の違いともいえるのである。

/p/ という音は日本語にもあり大変やさしい音だと考えられている。しかしこの /p/ も実は1つの音ではないのである。ワラ半紙を4つ切位の大きさに切るか、ローソクでも準備して見よう。今、口の近くに端をつまんでワラ半紙を手にして *pace*, *peak* と発音して見よう。その度に口から出る強い息で紙が動く筈である。ローソクなら焰がはげしくゆらぐだろう。この場合の /p/ を「紙を動かすP」と名付けておく事にする。今度は同じ事を *space*, *speak* という単語で実験して見よう。不思議と前よりも自分では強く発音しているつもりでも紙は動かさずともしない。もし「紙を動かすP」で発音したら、一寸奇異な発音に聞こえる筈である。今度は *top*, *soup* を発音してみよう。アメリカ人が発音するのを聞いていると時々Pがはっきり聞こえない事がある。不思議に思って口を見ているとPの所で両方の唇がしっかり閉じるからPは発音されているのだが、他のPと違って唇をもう一度はなさない発音が、よく使われている。こうなるとPには3つのPがあるという事になる。「紙を動かすP」、「紙を動かさないP」、「破裂しないP」。しかし全部が /p/ という同じ音素だと考えられている。言いかえれば /p/ というものは現実にはなくて、あるのは「紙の動くP」「動かないP」「破裂しないP」なのである。この現実には我々が使っている音の事を異音 (Allophone) という名前をつける。/p/ という音素にはこういう異音が含まれているのである。異音で必ず記憶しておかなければならないのはどの異音はどこで使われるかという事である。「紙の動くP」は *pace*, *peak*, *apart* のように強勢のある音節の前で使われている。「紙の動かないP」は *speak*, *space* のようにsの次で使われたり *upper*, *supper* のように強勢のない音節の前で使われている。「破裂しないP」は語尾に来ている場合に使われている。「英語らしさ」というものの一因は実はこうした細かい音を上手に使う事で、大変むずかしそうに聞こえるが、ちょっと習慣をつけさえすれば自由に使う事が出来る。音はむずかしい単語や文法事項を覚えるのと違って終始使っているだけに習慣化し易いのである。

こういう違う音を1つの音素と考える理屈は何処から生じるのだろうか。第1は3つとも非常に似通った音だという事である。声帯は振動していない。

両方の唇を使う。そして空気を一度遮断する。違いは強い息が出ているかどうか、唇がもう一度開くか開かないかという点だけである。この事は前に比喻を使ったように1人の人が蝶ネクタイをしたり、時に普通のネクタイをしたり、時と場所によって寝間着を着たり、オーバーを着たりしているが、その人の特徴は何時でも似通っているから1人の人物だと判断されているのに似ている。これを「音声学的類似性 (Phonetic Realism) の原理」という。第2にはある音はある場所に起こり、他の音は他の場所に起こっているというようにお互に同じ場所では起こらないか、起っても母国語としてその言葉を話している人達には大した違いがないと思われている点にある。最初の方は相補的分布 (Complementary Distribution) という名前で知られているが、犯罪調査で犯人わり出しに使う方法と同じである。それらしい人物(音素論の Phonetic Realism に相当する) が、何時何分に横浜で目撃されたが、それから1時間後には東京でも目撃され、更に数時間後に名古屋でも目撃されたとする。これは同一人物の行動と認定される(相補的だからである)。しかしいくらそれらしい人物でも同じ時間に3箇所で見撃されたり、同時刻、同じ場所で目撃されたのでは3人は違う人物と認めざるを得ない(対立するから)。

ここで音素論が教えてくれた事の中から2つだけ大切な考えを取り出して見よう。

1. 各国語には音素と呼ぶ大切な音がある。音素は100%に区別されなければならない。
2. 音素は実際には色々なメンバーをもっている。適当な所に適当なメンバーが使われなければならない。「英語らしさ」の一因はこの上手な使い方にある。

さてこの2つの内、どちらが大事であろうか。勿論音素を正しく100%に区別する事である。いくら英語らしい発音でも、もし正確でなかったとしたらそれは災いの元である。しかし相手のいう事を理解し、又相手に自分のいう事を理解させるためには、第2の英語らしさを強調する事も忘れる事は出来ない。/l/ と /r/ の区別の確立はどんな苦勞をしてでもやりとげなければならない。第1目標の1つである。しかし今迄にあまりに無視されて来た第2目標の「英語らしさ」をきずいて行く事も、それなりに重視して行く事が望ましい。(次号につづく)

## 人 物 紹 介



Dr. R. W. Zandvoort  
(Groningen 大学の  
同教授の研究室にて)

私が Zandvoort [zándfort] 教授に会ったのは 1960 年 11 月 21 日、Amsterdam から列車で 2 時間半程のところにあるオランダ東北部の都市 Groningen である。

前日の夕方 Groningen に着いていた私は、かねて同教授と手紙で打合せておいた通り、翌朝早速ホテルから同教授宅へ電話した。ところが電話口にあられた夫人が、教授は今しがた another Japanese gentleman と出掛けたところだという。オランダ訪問の唯一の目的が同教授に会うことだったので、私は一寸がっかりしたが、そのうち教授から連絡があらうと心待ちにしながら、一方では another Japanese gentleman とは一体何者だろうなどと思ったりもした。

そのうち間もなく同教授が私のホテルを訪ねてくれた。その時始めて問題の another Japanese gentleman が東京教育大学の太田朗氏であることが分かり、お互いに「なあんた。君だったのか。」と笑った次第である。

何分太田氏と私が同教授を Groningen に訪ねた最初の日本人だったというので、同教授は大変喜んで午前 10 時頃から私共が Groningen 駅から Amsterdam 行の列車に乗り込む午後 4 時頃まで実に親

切に案内してくれ、また私共の相当ぶしつけな質問にも快よく答えてくれた。

この写真でも分かるように教授は実に透徹した頭脳の持主であり、その博学なことは驚くほかはなかったが、なかでも感心したのは同教授の誠に見事な英語である。私は今まで数多くの外国人の英語に接したが同教授程の立派な英語を聞いたことがない。太田氏もこれには感心しておられた。

同教授は彼の主著 *A Handbook of English Grammar* について面白い話をされた。第二次世界大戦中オランダはナチス・ドイツに占領され、Groningen 大学は学生がナチスに対してサボタージュをやったというので閉鎖され、大学教授である彼には仕事がなくなった。そこで始められたのがこの本の執筆である。だからもしナチスによって大学が閉鎖されなかったらこの本は生まれていなかったであろうと彼は笑っていた。

ELEC 主事  
山 家 保

# Question Box

〔関係代名詞と後置修飾〕

## Question

NATE (*New Approach to English*) 3 (A) の第3課で関係代名詞を扱っておりますが、テキストの順序で数えるとなると、関係代名詞の省略された文から入ることになります。これは従来の行き方と逆になります。従来の教科書では、主格の who に始まり、which, that を教え、目的格の whom (who), that, which に入り、最後に省略された形の文章を教えるようになっていました。省略された文章から入るのは困難に思えるのですが、どう扱ったらよいのでしょうか、お教えください。

(熊本・K. O.)

## Ans.

関係代名詞の指導の重点は、関係代名詞そのものの機能ではなく、clause による修飾構造である、ということをおぼろげに考える必要があります。いわゆる「関係代名詞の省略」の問題は、この観点に立たなければ正しい解決は得られないし、関係代名詞の正しい指導法も生まれません。

関係代名詞を省略しない形から教えたほうがよいという主張には、およそつぎのような論拠があると考えられます。

「関係代名詞の機能、およびその文の構造を理解させるには、その文を構成している2つ（またはそれ以上）の要素——clauses——に分ける練習が有効である。この作業は関係代名詞が省略されているとかなりむずかしくなる。また、関係代名詞の主格の形はふつう省略されないから目的格の形も省略しないほうが混乱を起こさないし、主格と目的格とを比較することができるので理解しやすい。」

*New Approach to English* 3 (c) p. 27 の Exercise にあるように、関係代名詞を練習する方法として2つの文を結び合わせることに、2つの文に分けることが、従来よく使われて来ています。しかし、この方法のみが関係代名詞を理解させるに充分であると考えるのは早計です。いろいろな練習方法のうちのひとつとして見ればよいのですが、そうでないと、指導の仕方によってはかえって誤った知識を植えつけることにもなりかねません。*New Approach to English* 3 (c), Lesson 5, A. AT WEST HIGH SCHOOL から関係代名詞の省略された文を抜き出してみると、

- (1) The students I met were very nice to me.
- (2) A boy was eating an apple he had in his desk.
- (3) Did you understand everything you heard?
- (4) Did anything you saw surprise you?
- (5) He's the nicest teacher we have.
- (6) This is the biggest high school I've seen.

たとえば、(1)の文を「伝統的な」方法によって分解します。

- (1)' ① The students were very nice to me.
- ② I met them.

この2つの文からは、「私に対して好意的な学生たちがいたこと」と、「私がその学生たちに会ったこと」とがわかります。さて、教室ではこの(1)'の2つの文を関係代名詞 whom によって結び合わせ、“The students whom I met were very nice to me.” とするわけですが、これで whom が指導できたことにはなりません。すくなくとも (whom) I met という clause が The students を modify しているというこの文の構造上の point は押えられていません。「②の them は The students をさすから、them を The students を先行詞とする関係代名詞 whom として、“The students whom I met…” のように結び合わせると、whom I met は The students の modifier になる」というような説明もかえって混乱を招くだけです。こういう、2つの文を結合したり、2つの文に分解したりする作業は、その構造——修飾構造——をあきらかにする助けにはならないのです。もうひとつ(4)をやはり同じ方法で分解してみます。

- (4)' ① Did anything surprise you?
- ② You saw anything.

①の文は(4)と価値にほとんどかわりはありませんが、②は(4)とはまったく無関係の叙述です。Anything でいいのか、something に直すべきかもあやふやです。ともかく(1)~(6)の文を説明するのに、このような方法を使っているのは、結局自縄自縛におちいったり、現代の慣用法(usage)に合わないことを教えたりするようになる危険があります。関係代名詞を省略しない形から先にはいったほうがよいという考え方は、ここで完全にその論拠を失ってしまいます。

では、関係代名詞の主格と目的格とを contrast させて指導しようという考えはどうでしょうか。

- (7) The students who were studying there were very nice to me.

- (8) The students *whom* I met there were very nice to me.

この contrast は *who* と *whom* の機能の違いを示してくれます。しかし、相変らず、修飾構造の解明になっていません。この段階にとどまるかぎり、

- (7)' ① The students were very nice to me.  
② They were studying there.  
(8)' ① The students were very nice to me.  
② I met them there.

このような、分解または結合の方法を使わなければならないからです。問題はふたたび元へ戻ってしまいます。

では、この分解・結合の方法をとらないとすればどうしたらよいか。すでに指摘したように、指導の重点は、*who* や *whom* などの関係代名詞そのものにあるのではなく、修飾構造にあるのです。そして、この場合はとくに *a big dog* などの前置修飾構造に対して後置修飾構造です (Post-Modification [例] *a box too heavy to lift*)。Post-modification の簡単なものはすでに一年生のときに指導してあります。

The pen on the desk is his [=Tom's].

(New Approach to English 1, p. 52)

したがって、後置修飾構造そのものは目新しいものではありませんが、抵抗があるとすれば、それは、The pen — is his. の空所に *clause* が来るとということに対する抵抗です。再々くりかえすとおり、この抵抗は分解・結合の方法では排除することができません。

さて、

- (9) The students — were very nice to me.

この文の — のところは、たとえばつぎのようなもので埋めることができます。

- a) from Japan  
b) studying there  
c) who were studying there  
d) with whom I talked  
e) (whom) I met

つまり (9) の文の空所は、*phrase* でも *clause* でも、ある一定の型をもったものであれば、とにかくみたくすることができるわけです。指導にあたっては、この型 (pattern) を把握させることに重点がおかれます。

つぎの段階では、

- (9)' — were very nice to me.

この (9)' の文の空所をみたくすることができるものと、できないものとを区別することを練習します。

- c)' 1. The students who were studying there.  
2. The students were studying there.  
d)' 1. The students with whom I talked.  
2. I talked with the students.  
e)' 1. The students (whom) I met.  
2. I met the students.

c)' ~ e)' における 1. と 2. の contrasts で 1. だけが (9)' の

空所にはいることができ、2. はできないのだということ、いわゆる「関係代名詞の指導」の重点はここにあります。

ちなみに上の c)' ~ e)' それぞれのの修飾構造を記号式であらわすとつぎのようになります (注1)。

- c)' N J V [J is obligatory.]  
d)' N F J N-V [J is obligatory.]  
e)' N J N-V [J is optional.]

この記号式で e)' の J is optional. という注は「関係代名詞の省略」の問題と関連して注意すべきものです。

「関係代名詞の省略」という言い方は必ずしも正確ではありません。e)' の型の場合、関係代名詞はあってもなくてもいいわけで、ある場合が正統で、ないのは正統でない俗な形であると考えるのは間違っています。あくまでも J is optional で、どちらも正しい英語です。注2)

ここで再び、実際に教室では N J N-V の型からはいるか N N-V の型からはいるかをあらためて考えることにします。どちらも正しい英語であり、かつ、どちらから先にはいっても、指導上さしつかえはおこらないのですから、この決定は別の基準によっておこなわれることとなります。それは、どちらが多く使われるか、ということです。口頭訓練を基礎とする学習指導方法をとる以上、口語英語にまずとりかかったほうがいいでしょう。文語的なものはあとまわしにします。口語英語では N N-V の型が多く使われます。文章をかく場合とくにあらたまった場合はどちらともいえません。

注1) この書き表わし方は Everett Kleinjans の「日英両語の比較と英語教育」(大修館・英語教育シリーズ・第19巻)による。N 被修飾語の名詞、N (名詞)、V (動詞) F (Fries の function words の分類による F Group の語。いわゆる前置詞がこれにはいる) J (おなじく J Group の語。関係代名詞、関係副詞、接続副詞などがこれにはいる)

注2) 研究社・英語教育事典・語学編 Relative pronoun in Ellipsis 参照

(若林 俊輔)

#### (16ページより)

であり、各々の新しい建築がそれに先行するもののうえに築かれていくものであることを認識しないわけにはいかなかったのである。そうして、しばしば、かつ当然なことながら、ややもするとよく誇張されがちである新しい主張に公正な評価をもたらすテストとなるものは、それらの主張が教室でどのようにあらわれるかということである。言語の教育と言語の教師は、しばしば、新しい理論のテストでありテスター (検査者) であって、彼らはどれが有用な理論であるか確証を見出し、過去において有用であったものと統合していくのである。願わくば、今後も永久に常にそうでありますように。

(完)

## 統一採択に抗して

統一採択強化の新路線に沿って行なわれた教科書採択にまつわる贈収賄が大きく社会問題にもなりかねない昨今ではある。業者側、採択側それぞれもっともらしい言い分はあるようだが、ここに目からウロコが落ちる話がある。

中央線甲府駅から北へバスで1時間、山道を徒走で2時間ばかり登ったところに戸数50戸余りの黒平町という山村がある。そこに生徒数70名余りの小中合併校がある。中学生は29名、へき地3級地、標高1,200米。父兄の職業は炭焼き、猫のひたいほどの畑にソバ、アワ、野菜を植える程度。中学を終えると長男以外は町工場の労働者として山をおりる。高校へ進学する生徒は3年にひとりいるかいなか。

こうした環境の中で英語を教える淡路克浩教諭は、生徒の知能と指導要領とをよく検討して、黒平町における英語教育の目的、教育計画を自ら考え出さなければならなかった。甲府市で立てたものを適用するにはあまりにも困難がありすぎたからである。独自の教育計画に基づいて教科書を選ぶ必要が生じたのである。そしてT教科書を選んだ。

甲府市では市教委から出された教科書統一採択の線に沿って、展示会→学校決定→教科部会決定→校長会決定→市教委決定→通告公示の順で各教科書の検討が行なわれた。部会及び校長会での積極的な発言もむなしく、K教科書が甲府市の教科書として決定された。しかし、淡路教諭はあきらめなかった。最後の望みをたくして、黒平町の特殊事情をしたため、T教科書を使用したい旨市教委に申し出たのである。この熱意と彼を力強く支持した校長をはじめ、教頭以下全職員の支援は、ついに市教委を動かしたのである。黒平町だけはT教科書の採択が許されたのである。

この成果について、淡路教諭は次のように反省している。

1. 私自身、教科書検討に今まで不勉強であったこと。
  2. 固定観念にとらわれなかったこと。
  3. 校長をはじめとして教頭以下の職員の支持と援助があったこと。
  4. 校長会での弁論に校長が大変な努力をしてくれたこと
  5. 市教委が学校の特殊事情をよく理解してくれたこと
- そして、最後に淡路教諭が得た教訓は「たとえ少数意見であっても信念に基づいて努力してみることが大切である」ということであった。

この種の出来事が来年は全国いたるところで聞かれるようになることを願ってやまない。

## ELEC 告知板

### [ELEC, 各地の研究活動を援助]

最近、英語教育・英語教授法に関する研究会、講習会等が数多く開かれ優秀な成果が発表されてきているが、一方これらの研究に対する援助が強く望まれている。

ELEC では、積極的にこの要望にこたえ、各地の要請に応じて、研究会等に講師を派遣し、研究活動を援助することになった。講師としては、ELEC 実行委員会委員、ELEC 主事、アメリカ人講師、等がこれに当たる。

詳細は、日本英語教育研究委員会 (ELEC)、東京都港区麻布飯倉片町12 鈴谷会館内 (電話 東京 481-5743) へ照会されたい。

### [ELEC Institute 受講生募集]

4月に始まった ELEC 英語講習会も9月に終り、現在第2期が始まっている。受講生は350人。なお、第3期の受講生を来春募集する。詳細は ELEC 事務局へ。

### [ELEC 出版物の発行]

ELEC 英語講習会のテキストが出版されました。御希望の方は大修館書店へお申し込み下さい。

#### ELEC ENGLISH COURSE Part I

by Archibald A. Hill (¥750)

#### ELEC ENGLISH COURSE Part II, Vol. 1

by Janet Callender (¥460)

#### ELEC ENGLISH COURSE Part II, Vol. 2

by Janet Callender (近刊)

## 編集後記

9月に第3号を発行する予定でしたが、こんなにおくれてしまったことを深くお詫び申し上げます。お忙しい中を「神田乃武の思い出」を寄せられた高木先生、面白い記行を書いて下さった Thompson 先生にお礼を申し上げます。牧野先生の「英語音素論入門」は継続していただくことになっておりますが、誰にもわかる音素論として喜ばれることを信じます。山家先生の「人物紹介」も連載記事であります。第4号には A. A. Hill 教授の "Literature in Language Teaching" が載ります。御期待下さい。

### ELEC BULLETIN 第1巻 第3号

定価 50円 (送料20円)

昭和36年12月1日発行

◎ 編集人 日本英語教育研究委員会

主幹 中島文雄

発行人 鈴木一平

発行所 株式会社 大修館書店

東京都千代田区神田錦町3の24

電話 東京 (291) 3961 振替東京 40502

# ELEC

THE ENGLISH LANGUAGE EDUCATION COUNCIL, INC